

第1図 七ヶ浜町内および周辺の遺跡

鬼ノ神山貝塚では、晩期後葉（大洞A式期）の製塩炉と考えられる複数の焼窯跡が発見され、周辺から製塩土器片が多数出土している（七ヶ浜町教育委員会1982）。

遺跡の立地をみると、早～中期の遺跡は標高30～40mの丘陵平坦部や緩斜面に立地する傾向が強く、後・晩期の遺跡は、標高5～20mの丘陵端部や海岸低地に立地する遺跡が多い。こうした立地の違いは、海水面の変動による汀線の変化や生業形態の違いなど、各時期の自然環境や社会背景と連動していると考えられる。

弥生時代

弥生時代は縄文時代に比して遺跡数が減少し、貝塚の規模も縮小する。縄文時代晩期中葉以降、それまで丘陵頂部や集落周辺の斜面に見られた貝塚が海岸低地や海蝕洞窟に小規模な貝塚が形成されるようになり、貝塚の立地や規模に変化が見られる（菅原2005）。遺跡の立地は縄文時代晩期の遺跡の立地を踏襲しているが、製塩などの作業場として海蝕洞窟を利用する例が散見され、新たな土地利用の動きが見られる。

隣接する多賀城市大代地区に中期の「樹形（圓）式」の標式遺跡である樹形圓貝塚が所在するなど、町内でも中期前葉～中葉の遺跡が多く所在している。町内の遺跡としては、東宮浜地区の東宮貝塚（鳳寿寺貝塚）、水浜遺跡、代ヶ崎浜地区的清水洞窟貝塚、吉田浜地区の二月田貝塚（空幕貝塚）、松ヶ浜地区の林崎貝塚、汐見台地区的鬼ノ神山貝塚などが挙げられる。東宮貝塚（鳳寿寺貝塚）は標高7mの丘陵斜面部と斜面下の低地に所在する貝塚・生産遺跡である。これまでの調査で中期の製塩遺構が検出され、弥生土器や製塩土器、ベンケイガイ製貝輪などが出土している（宮城県塩釜女子高等学校社会部1965、七ヶ浜町教育委員会2019）。清水洞窟貝塚は海蝕洞窟を利用した遺跡で、中期の土器を中心とする縄文時代晩期～古代の製塩土器、骨窓などが出土している（大場1943・1948、七ヶ浜町教育委員会2010）。二月田貝塚では谷部の低地から中期前葉～中葉を主体とする遺物包含層が検出され、異形土器やクルミ・トチなどの植物遺存体が出土した（七ヶ浜町教育委員会2016）。また、表探資料として穂摘具（石庵丁）が見つかっており、丘陵に挟まれた細長い谷地で小規模な稻作も行われていた。

古墳時代～平安時代

七北田川下流から河口に位置する多賀城市や利府町では、円墳や中小の円墳からなる古墳後期の古墳群が築造され、その周辺の集落跡からも古墳前期～後期の遺物が出土している。仙台市沼向遺跡の調査成果から仙台湾沿岸部の古墳時代の景観復元も試みられている（仙台市教育委員会2010）。町内ではこれまで古墳時代の遺跡の調査例がなく不明な点が多かったが、近年の調査で長須賀遺跡から古墳後期の底部穿孔壺が出土し、表浜貝塚から古墳後期の小規模な貝塚が確認されるなど、古墳時代後期から飛鳥時代の様相が徐々に明らかになっている（七ヶ浜町教育委員会2016）。

町内には、漆浜地区的樹形圓横穴墓群（7世紀末～10世紀）、砂山横穴墓群（7世紀後半～8世紀初頭）、薬師堂横穴墓群、花渦浜地区的高山横穴墓群、東宮浜地区的水浜横穴墓など多数の横穴墓が点在している。これら横穴墓の多くは、海蝕や風化による崩落、倉庫や防空壕への転用といった後世の改変を受けており、築造当初の姿を残しているものは少ない。漆浜地区的横穴墓群は多賀城市大代地区の大代横穴墓群を起点とし、漆浜・松ヶ浜地区的沿岸部まで続く丘陵斜面部に築かれた本町最大規模の横穴墓群である。砂山横穴墓群では13基の横穴墓が確認され、土師器、須恵器、直刀、ガラス玉などが出土した（宮城県教育委員会1976）。薬師堂横穴墓群では昭和45（1970）年に東北学院大学工学部技術史研究会による調査が行われ、開口した横穴墓を10基確認している。横穴墓は風化や後世の著しい改変を経ていたため、出土遺物は刀子片と考えられる金属製品1点が出土したのみである。高山横穴墓群では15基以上の横穴墓が確認され、新たに発見された横穴墓の羨道部から板状耳付壺（三

耳壺) や長頸壺などが出土している(七ヶ浜町教育委員会2016)。清水洞窟貝塚では古代において海蝕洞窟を墓域として利用しており、昭和17(1942)年の調査では幼児を含む26体の人骨が出土している。奈良・平安時代の遺跡は東宮浜地区の東宮貝塚(鳳寿寺貝塚)や左道遺跡、水浜遺跡、花潤浜地区的長須賀遺跡や表浜貝塚、汐見台地区的鬼ノ神山貝塚などがある。これらの多くが海岸に面する緩斜面や海岸の背後地などに立地している。表浜貝塚では「宮木」の刻書のある須恵器片が出土しており、8世紀前半～中頃と考えられる「宮城郡」の成立や「宮木」から「宮城」への表記の移行に関する重要な資料である(七ヶ浜町教育委員会2016)。水浜遺跡では平安時代の堅穴住居跡3棟と掘立柱建物跡1棟、製塙炉13基を検出している(七ヶ浜町教育委員会1993)。左道遺跡ではこれまでの調査で平安時代の堅穴住居跡が32棟検出され(七ヶ浜町教育委員会1992)、近年の調査ではカマドを南側に構築する堅穴住居跡1棟を検出している。古代の重要な港である塩窓を意識した遺跡であると考えられる。清水洞窟貝塚や表浜貝塚、長須賀遺跡では開窓式離頭鉗や複合釣針(擬餌針)が出土しており、積極的な海産資源の利用がうかがえる。また、東宮貝塚(鳳寿寺貝塚)や表浜貝塚では集落内の祭祀・儀礼の様相を知る資料として卜骨が出土している。花潤浜地区的鼻節神社(町指定文化財)には、周辺で採れた昆布やアワビなどの海産物を陸奥国府多賀城へ供給する「厨」の印である「国府厨印」(町指定文化財)が伝わっており、古代の七ヶ浜と多賀城との関係を伝える貴重な資料である。

鎌倉時代～江戸時代

鎌倉時代以降の遺構・遺物は少ないが、湊浜地区的湊浜薬師堂の磨崖仏(町指定文化財)は中世の信仰の様相を伝える資料として特筆される。磨崖仏は平安時代末～鎌倉時代前半の作とされる7体の薬師如来坐像で、薬師堂横穴墓群を構成する横穴墓であった洞窟の奥壁に彫られたものである。現在はこのうち4体が残存し、慈覚大師(円仁)が一夜で彫ったという伝承が残る。また、磨崖仏の間に14世紀頃と考えられる五輪塔の影刻も残る。境内には慈覚大師お手植えの伝承が残るカヤの大木が現生している。また、代ヶ崎浜地区には梵字による阿弥陀曼荼羅が描かれ、建治3(1227)年の銘を持つ町内最古の石碑「建治三年銘古碑」(町指定文化財)があり、当時の仏教信仰を伝える資料である。周辺には正応2(1289)年や元徳2(1330)年の記年銘を持つ板碑が所在しており(堀野1992)、当初の建立場所から移動しているものの、代ヶ崎地区には古い記年銘の板碑が集中している。

中・近世の城館跡としては、半島東部の海岸段丘上に築かれた花潤城跡(花潤浜地区)や吉田城跡(吉田浜地区)がある。花潤城跡は留守氏の家臣である花潤紀伊の居城とされ、漁業の振興と鼻節神社の保護を行ったとされる。また、吉田城跡は同じく留守氏の家臣の吉田右近の居城とされる。かつて大規模な空堀が存在したと伝わる。ともに詳細な調査が行われていないため、縄張りなどについては不明である。

江戸時代の万治～寛文・延宝年間に行われた貞山堀(御舟入堀)の開削や七北田川の改修は、七ヶ浜周辺の交通や物流に大きな変化をもたらした。貞山堀は江戸・明治時代にかけて阿武隈川河口から旧北上川河口を結ぶ運河として順次整備された、全長約42kmにも及ぶ全国最長の運河である。町の西部を南北に貫く形で塙窓市牛生から多賀城市大代を結ぶ御舟入堀が寛文13・延宝元(1673)年頃開通し、これ以降七ヶ浜半島は陸地から分断される形となった。その直前の寛文10(1670)年には七北田川の河口を湊浜から蒲生村(仙台市宮城野区蒲生)に付け替える工事が完了し、長く七北田川・砂押川の河口の港として栄えた湊浜一帯が衰退するなど、七ヶ浜周辺の状況は大きく変化した。

明治22(1889)年には集落が点在する7つの浜を合わせ、七ヶ浜村が誕生した。昭和34(1959)年には町制を施行し、現在に至っている。七ヶ浜村誕生前年の明治21(1888)年には東北地方最初の海水浴場として菖蒲田海水浴場が開設した。隣接する花潤浜高山・戸谷場地区的丘陵には外国人別荘地が順次整備された。これを契機に別荘地を訪れる外国人と地域住民の交流が始まり、現在は国際交流

の町として知られている。

第2章 調査計画と実績

第1節 調査体制

本書に掲載した埋蔵文化財の発掘調査と整理作業は宮城県教育庁文化財課の協力・助言を得ながら、七ヶ浜町教育委員会が主体となり、生涯学習課文化財係が担当した。職員の体制は下記のとおりである。

教 育 長：武田 光彦

生涯学習課長：庄子 克也（平成27年度）、小野 豊（平成28年度）

鈴木 雅浩（平成29年～令和2年度）

文化財係長：菊池 克宏（平成27～29年度）、小野 豊（平成30年度）

加納 貴美子（令和元・2年度）

※平成30年～令和2年度は歴史資料館長兼文化財係事務取扱

主 任 主 査：田村 正樹

非 常 勤 職 員：佐々木 広美（平成27年度）、鈴木 喜雄（平成27～30年度）、小澤 恵（平成27～30年度）

木村 由美子（平成28年～令和2年度）、村上 理江子（令和元・2年度）

矢本 聰子（令和2年度）

※令和2年度は会計年度任用職員

発掘調査作業員・整理作業員

平成27年度：赤間 正雄、伊藤 美輪、木村 由美子、佐藤 要市、虎井 優子、廣野 徳、舟山 武

矢竹 真由美、矢本 聰子、吉田 麻美

平成28・29年度：佐藤 要市、矢本 聰子、吉田 麻美

平成30年～令和2年度：吉田 麻美

第2節 調査計画と実績

本書で報告する調査は、復興応より復興交付金事業の基幹事業に位置付けられる「埋蔵文化財発掘調査事業（A～4事業）」の「東日本大震災復興交付金」を第1回目の申請（平成24年3月）において得て、七ヶ浜町域を対象として平成27年度下半期（平成27年9月～平成28年3月）及び平成28年度、令和元年度、令和2年度に実施したものである。尚、平成29・30年度においては本事業の対象となる調査はなかった。個人及び中小企業などによる復興事業については、事前協議や計画変更により確認調査や本発掘調査に至る事案はなかった。七ヶ浜町及び宮城県による復興事業に伴う確認調査については、早期に遺跡の内容を把握し、調整を図るために6事業7遺跡の調査（令和3年2月末現在）を実施した。内訳は平成27年度下半期が1事業1遺跡、平成28年度が2事業2遺跡、令和元年度が3事業3遺跡、令和2年度が1事業1遺跡である（第1表）。

第3節 調査方法

調査は遺跡の範囲、内容、時代などの把握及び検出遺構の記録を目的とし、宮城県教育庁文化財課の指導・助言を受けながら、必要最小限の調査とした。事業主体者より提供を受けた計画概要や計画図などを基に、地権者等の同意を得て計画範囲内に調査区（トレンチ）を設定した。その範囲に対して、重機及び人力で表土や盛土などを掘削、除去した。掘削後、人力で精査し、遺構検出、遺構観察、断面観察、平面図・断面図などの作成、写真撮影を行い、調査の工程が完了した後に埋め戻しを行つ

第1表 復興交付金事業による発煙調査実施施設一覧表 平成24年～令和2年度

番号	本署 管轄 部局	調査年度	調査区域	委託主体	調査地	調査 日程	調査用具	運営・運営者・有無	
								運営	運営者
1	●	平成24年度	筑波神社周辺、筑波公爵住宅敷地	七ヶ浜町	七ヶ浜町鳥羽浜字浜子合	220m ²	平成24年6月1日～6月9日	運営士官、製造士官(税文庫)	
2	●	平成24年度 2012年度	長崎背後地(3ヘクタール)、新通良見 山邊櫻公園	新通良見、新通櫻公園	宮城県仙台市本郷 町高瀬野川下木郷 新通	7ヶ浜町花園字長崎背 新通	100m ² 平成24年6月23日～6月30日	古墳後円一平安 焼穴墓、土器群、四出郭	
3	●	平成25年度	磐田坂(築堤)	磐田坂(築堤)	磐田坂(築堤)	100m ² 平成24年7月27日～8月29日	古墳後円一平安 焼穴墓、土器群、四出郭		
4	●	平成25年度	磐田坂(築堤)	磐田坂(築堤)	磐田坂(築堤)	100m ² 平成24年11月13日～11月22日	遺構、遺物なし		
5	●	平成25年度	磐田坂(築堤)	磐田坂(築堤)	磐田坂(築堤)	120m ² 平成25年4月3日～4月11日	遺構、遺物なし		
6	●	平成25年度 2013年度	衣浦貝塚(5ヘクタール)	仙台市公團浜衣浦貝塚	七ヶ浜町	七ヶ浜町花園字中央一・中央二、 原宿	1120m ² 平成25年8月13日～平成26年1月3日	古墳後圓一平安 燒穴墓、貝塚、土器群、氣泡 層	
7	●	平成25年度	長尾貝塚(4ヘクタール)	南木井水谷遺跡 山城町水谷水谷遺跡	七ヶ浜町	七ヶ浜町花園字長尾町	210m ² 平成26年3月1日～3月16日	奈良、平安、遺物包含層、製陶土器 土器、半安、遺物包含層、製陶土器	
8	●	平成25年度	林崎貝塚(2ヘクタール)	林崎貝塚	七ヶ浜町	七ヶ浜町花園字林崎	70m ² 平成26年3月1日～3月16日	運営文庫、製造品、貝塚、遺物包含層	
9	●	平成25年度	阿田沼貝塚	阿田沼貝塚	七ヶ浜町	七ヶ浜町花園字阿田沼	260m ² 平成26年3月1日～3月16日	遺構、遺物なし	
10	●	平成25年度	津屋貝塚	津屋貝塚	七ヶ浜町	七ヶ浜町花園字津屋	39m ² 平成26年3月1日～3月16日	遺構、遺物なし	
11	●	平成25年度	磐田山遺跡(復興名稱)	磐田山遺跡(復興名稱)	七ヶ浜町	七ヶ浜町花園字磐田山	50m ² 平成26年3月1日～3月16日	遺構、遺物なし	
12	●	平成25年度 2014年度	月出山貝塚	月出山貝塚	七ヶ浜町	七ヶ浜町花園字月出山	30m ² 平成26年3月1日～3月16日	運営文庫、製造品、貝塚、遺物包含層、製陶土器、共生 土器、半安、遺物包含層、製陶土器	
13	●	平成25年度	神明遺跡	神明遺跡	七ヶ浜町	七ヶ浜町花園字神明	20m ² 平成26年3月1日～3月16日	遺構、遺物なし	
14	●	平成25年度	磐田神社付近	磐田神社付近	七ヶ浜町	七ヶ浜町花園字磐田神社	13m ² 平成26年3月1日～3月16日	遺構、遺物なし	
15	●	平成25年度	磐田神社付近	磐田神社付近	七ヶ浜町	七ヶ浜町花園字磐田神社	13m ² 平成26年3月1日～3月16日	遺構、遺物なし	
16	●	平成25年度	磐田公團浜衣浦貝塚	磐田公團浜衣浦貝塚	七ヶ浜町	七ヶ浜町花園字中央一・中央二、 原宿	30m ² 平成27年3月1日～3月17日	遺構、遺物なし	
17	●	平成25年度	長崎貝塚(7ヘクタール)	長崎貝塚	七ヶ浜町	七ヶ浜町花園字中央一・中央二、 原宿	47m ² 平成27年3月1日～3月17日	遺構、遺物なし	
18	●	平成25年度 2013年度	磐田貝塚(8ヘクタール)	磐田貝塚	七ヶ浜町	七ヶ浜町花園字中央一・中央二、 原宿	55m ² 平成27年3月1日～3月18日	奈良、平安、貝塚、遺物包含層、半安、土器群、 遺物、製陶土器	
19	●	平成25年度 2016年度	土居田貝塚	土居田貝塚	七ヶ浜町	七ヶ浜町花園字中央一・中央二、 原宿	192m ² 平成28年1月22日～2月7日	遺構、遺物なし	
20	●	平成25年度	阿田沼貝塚	阿田沼貝塚	七ヶ浜町	七ヶ浜町花園字中央一・中央二、 原宿	63m ² 平成29年2月4日	遺構、遺物なし	
21	●	平成25年度	白山塚	白山塚	七ヶ浜町	七ヶ浜町花園字中央一・中央二、 原宿	34m ² 令和元年1月30日～31日	遺構、遺物なし	
22	●	(平成23年度)	磐田背後地	磐田背後地	七ヶ浜町	七ヶ浜町花園字中央一・中央二、 原宿	106m ² 令和元年1月30日	遺構、遺物なし	
23	●	2013年度	二田田貝塚	二田田貝塚	七ヶ浜町	七ヶ浜町花園字中央一・中央二、 原宿	132m ² 令和元年4月9日～4月11日	運営文庫、製造品、貝塚、遺物包含層、製陶土器、 土器、半安、遺物包含層、製陶土器	
24	●	2013年度	林崎貝塚(3ヘクタール)	林崎貝塚	七ヶ浜町	七ヶ浜町花園字中央一・中央二、 原宿	72m ² 令和2年1月17日～1月25日	遺構、遺物なし	

た。掘削は遺構面検出までを基本としたが、一部で地山面まで掘り下げを行った。

第3章 震災復興事業関連遺跡の発掘調査（確認調査）

第1節 表浜貝塚（第2～14図、写真図版1～5）

（1）遺跡の概要

表浜貝塚は七ヶ浜町花濱字表浜一、表浜二、浜沼地内に所在する古墳時代後期～平安時代の集落跡、貝塚、製塩遺跡である（第3図）。町内には長須賀遺跡や水浜遺跡など主に陸奥国府多賀城へ塩を供給したと考えられる製塩遺跡が点在しており（第2図）、本遺跡もこのような遺跡の一つである。遺跡は表浜海岸背後の浜堤上に立地し、震災以前は住宅地と畠地が広がっていたが、現在はその大半が都市公園湊浜緑地の敷地となっている（巻頭写真3）。これまでに昭和63（1988）年、平成元（1989）年、平成11（1999）年に個人住宅建替えに伴う確認調査（1～4次調査）、平成25～27年度上半期に都市公園整備に伴う確認調査（5～7次調査）が行われている（第4図）。1～4次調査では堅穴住居跡や炉跡、溝跡を検出し（第10～13図）、土師器や須恵器、製塩土器、骨角製品、卜骨、動物遺存体などが出土している。5～7次調査では炉跡や土坑、貝塚、溝跡を検出し、三河湾沿岸地域の特徴を有する製塩土器片や「宮本」の刻書のある須恵器片などが出土している（七ヶ浜町教育委員会2016）。また、遺跡近くの丘陵崖面には奈良・平安時代の土師器・須恵器が出土した高山横穴墓群が所在し、本遺跡に関連する横穴墓と考えられる。平成25年度の調査では新たに3基の横穴墓（1～3号墓）を検出し、2号墓の羨道部からは板状耳付瓶（三耳瓶）と長頸瓶などが出土している（七ヶ浜町教育委員会2016）。

（2）調査要項

遺跡名 表浜貝塚（宮城県遺跡地名表登録番号 20003）

調査地 七ヶ浜町花濱字表浜一、表浜二、浜沼地内

調査原因 都市公園整備

調査担当 田村正樹（七ヶ浜町教育委員会）

調査期間 平成27（2015）年9月29日～12月18日（8次調査）

対象面積（事業面積） 50,406m² 調査面積 53m²

（3）調査の方法

花濱表浜地区は、高山外国人別荘地に挟まれた表浜海岸の背後に住宅地や畠地が点在していたが、東日本大震災による津波で甚大な被害を受けた。これにより表浜地区は現地での住宅再建などができるない災害危険区域（レッドゾーン）に指定された。町復興推進課よりこの区域の一部において都市公園を整備する計画が示され、事業内容を確認したところ、把握されている遺跡範囲のほぼ全体が計画地にかかることが判明した。過去の調査成果から計画地内に遺構などが残存していると想定されたため、遺構の残存状況、遺跡の性格、遺跡の範囲などを確認するために、平成25～27年度に4次にわたる調査を実施した。5次調査では町道天神堂線に開まれた範囲を中心に14本のトレンチ（1～14トレンチ）、6次調査では計画地西側の町道沿いに5本のトレンチ（15～19トレンチ）、7次調査では計画地東側に6本のトレンチ（20～25トレンチ）をそれぞれ設定し、調査を行った（第4・5図）。8次調査では計画地東端付近に6本のトレンチ（26～31トレンチ）を設定し、重機を使用して掘削を行った。調査区北側（26～29トレンチ）は町道より一段低くなってしまい旧来の地形が残存しているが、南側（30・31トレンチ）では過去の盛土造成により南東側に向かって高くなっている。

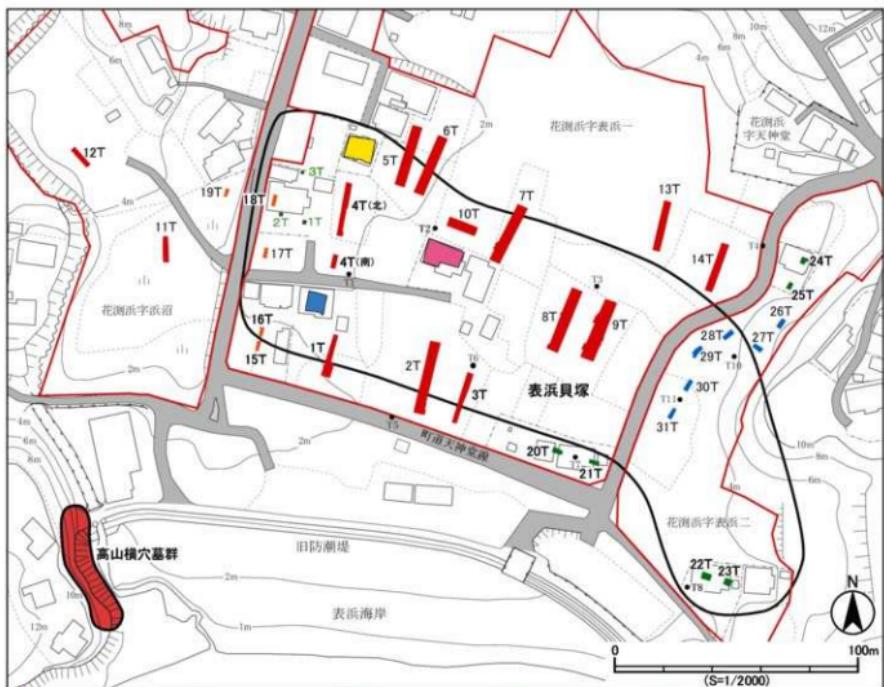


第2図 七ヶ浜町内の古代製塩遺跡



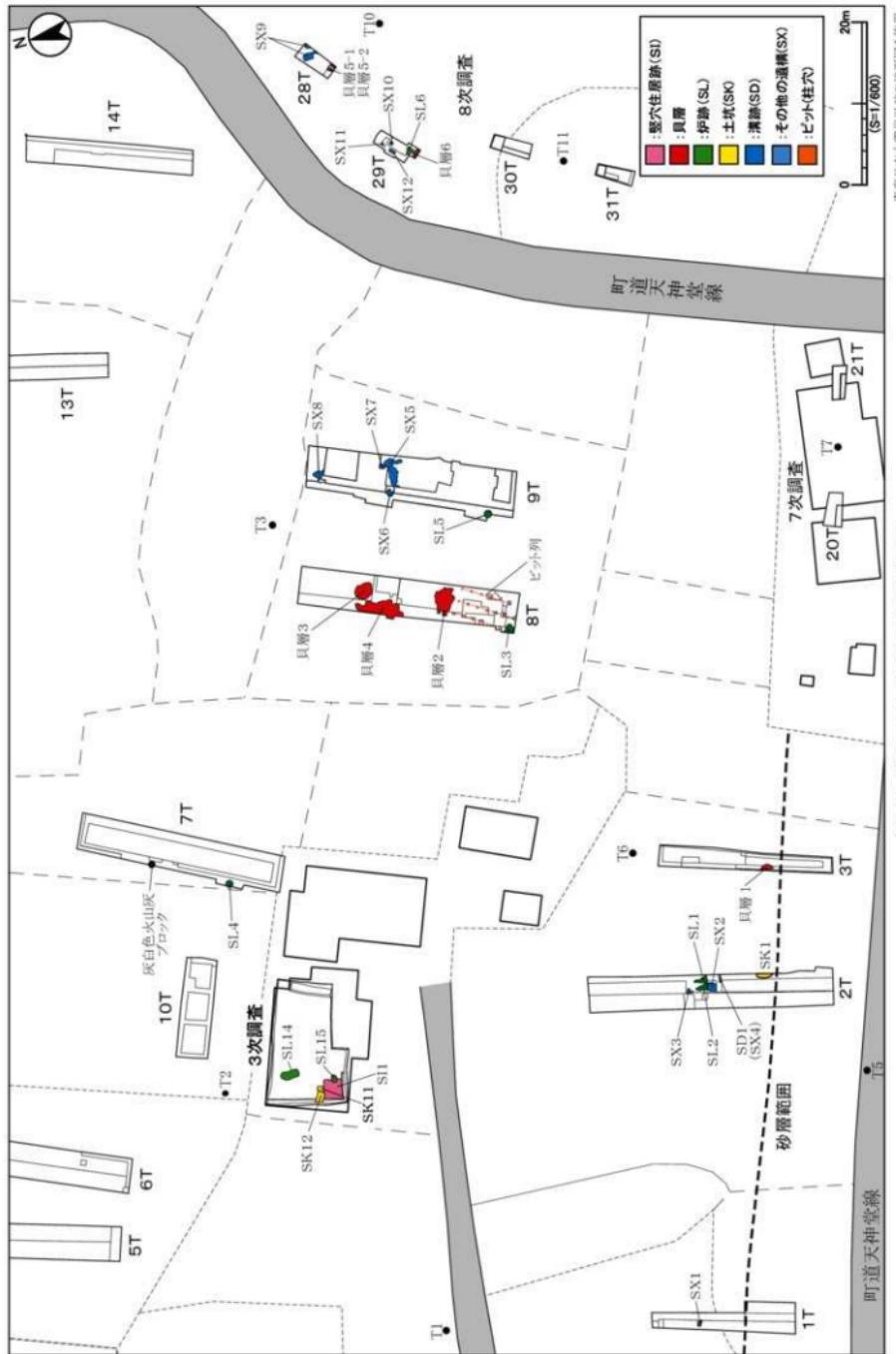
第3図 表浜貝塚の位置と周辺の遺跡

周辺の遺跡 4：君ヶ岡貝塚（縄文） 12：高山横穴墓群（奈良・平安） 13：鼻節神社遺跡（縄文・平安） 14：花渕城跡（中世・近世） 16：長須賀遺跡（古墳後期～平安） 34：藤ヶ沢貝塚（縄文）

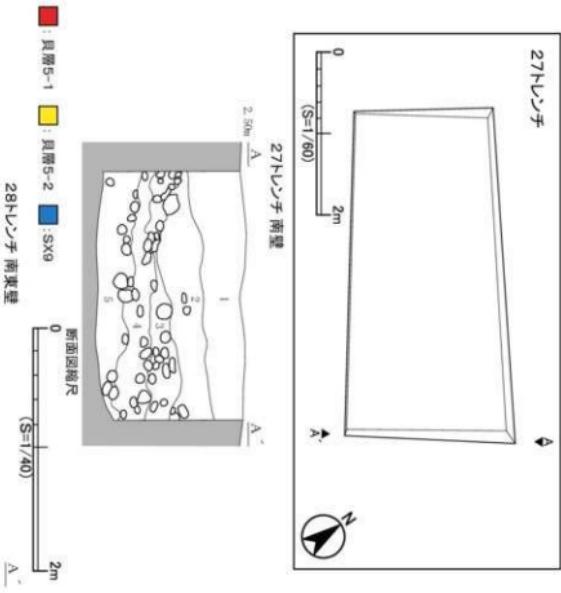
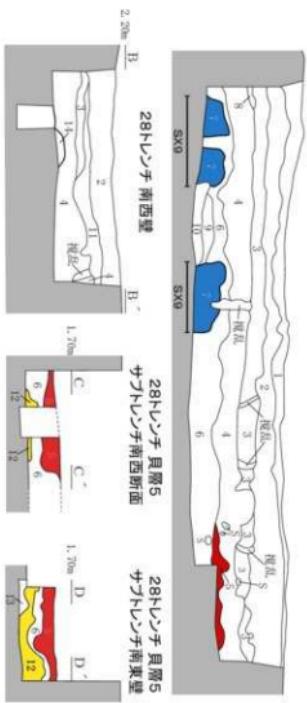
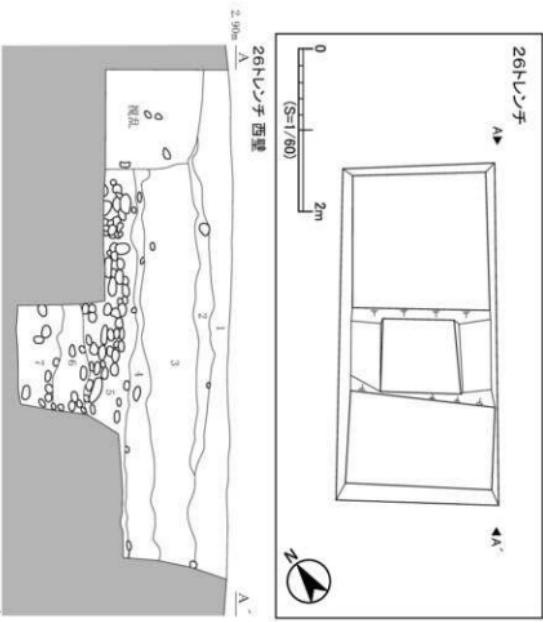
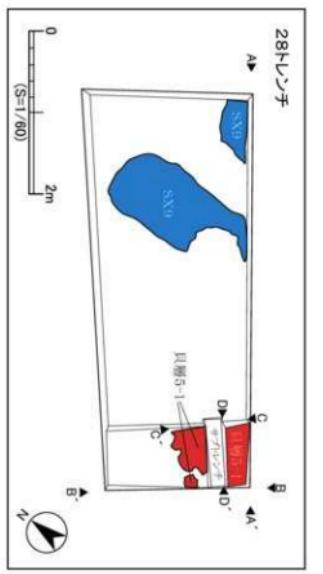


第4図 1～8次調査トレチ配置図

■：昭和63年度（1次調査） ■：平成元年度（2次調査） ■：平成元年度（3次調査） ■：平成11年度（4次調査） ■：平成25年度（5次調査）
 □：平成26年度（6次調査） ■：平成27年度（7次調査） ■：平成27年度（8次調査） ■：事業計画範囲
 東日本大震災以前の地形図を使用

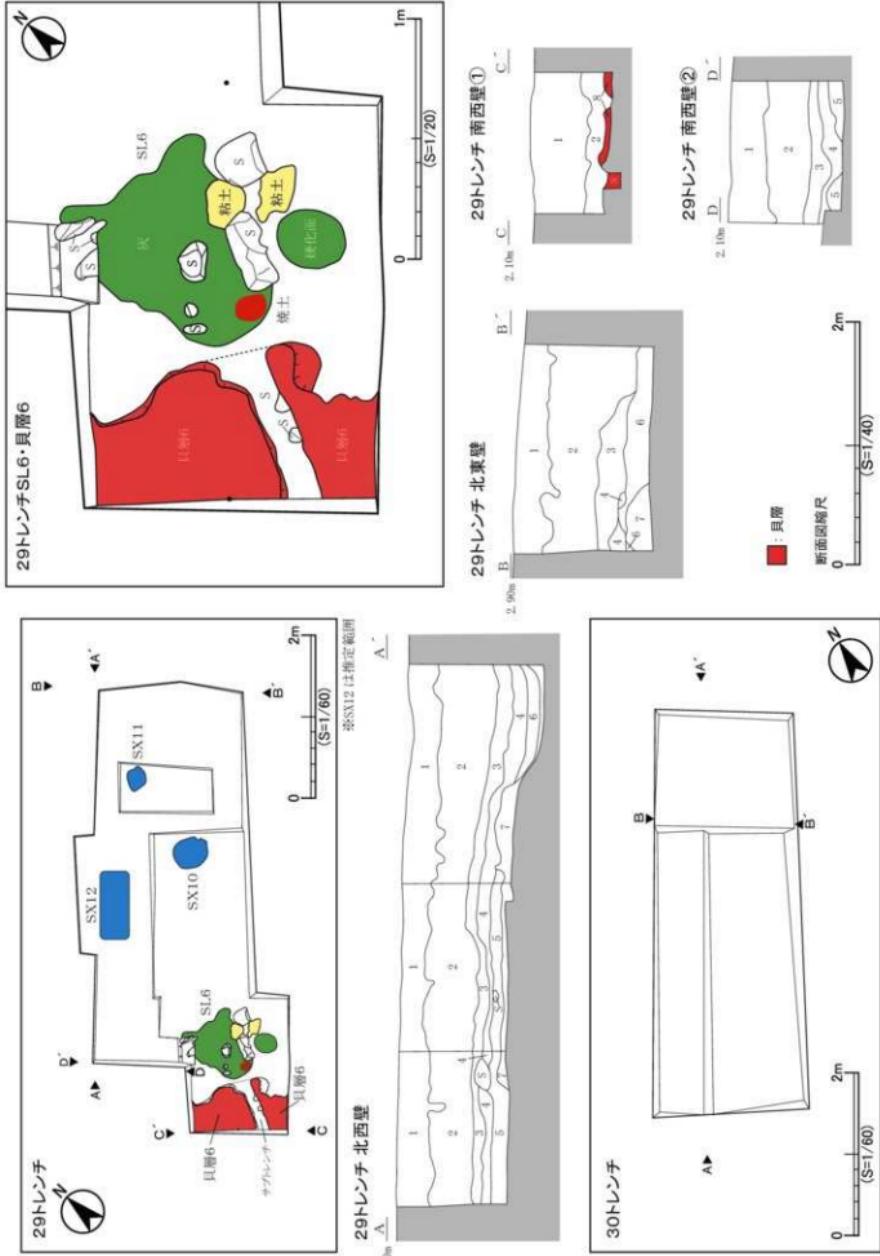


第5図 第3・5・7・8次調査構造配置図



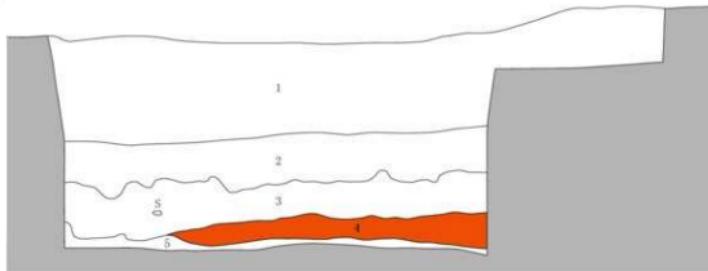
※26・27 トレンチ堆積土中の不整形の大糞はすべて隕を表す

第6図 26~28トレンチ平面図・断面図



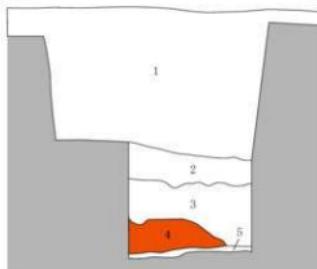
30トレンチ 南西壁

3, 10m A



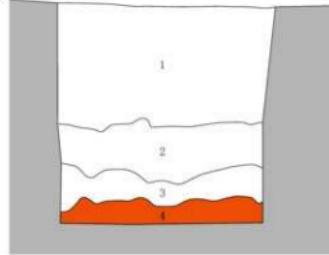
30トレンチ 北東壁

3, 10m B



31トレンチ 南西壁

2, 70m A'

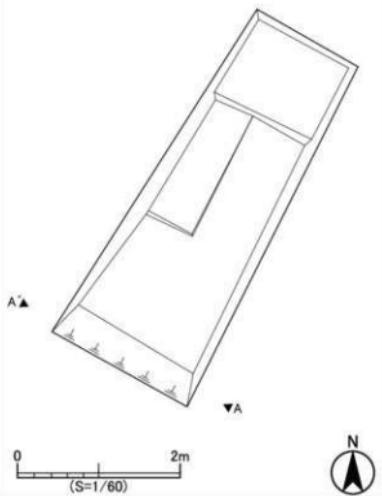


■: 遺物包含層

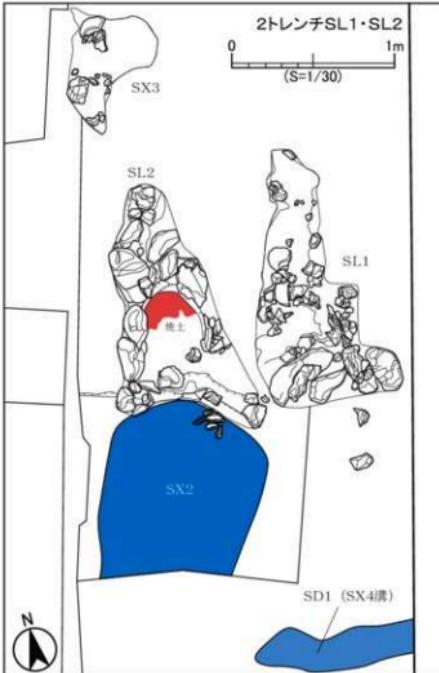
断面図縮尺

0 2m
(S=1/40)

31トレンチ



2トレンチSL1・SL2
1m
(S=1/30)



第8図 30・31トレンチ平面図・断面図 2トレンチ炉跡平面図

層番号	分類	土質	土色	特徴
1	土層	中粒砂	オリーブ褐色	25Y4/4 表土、盛土。大小の礫を含む
2	土層	-	黒褐色	10YR3/2 盛土前の表土、凝灰岩片・小礫を含む
3	土層	-	暗褐色	10YR3/3 凝灰岩片を含む (面積割合3~5%) 27トレント1層に対応
4	土層	-	黒褐色	10YR2/2 凝灰岩片・礫を含む (面積割合3~5%) 無機物
5	砂層	中粒砂	黒褐色	10YR2/1 直徑5~20cm程度の礫を含む (面積割合15~20%)
6	砂層	中-細粒砂	暗褐色	10YR3/3 直徑5~15cm程度の礫を含む (面積割合7~10%) 27トレント4層に対応
7	砂層	粗-中粒砂	暗褐色	10YR3/3 直徑数cm~15cm程度の礫を含む 上層に(約)大きな礫が多く、下層は四

第2表 表浜貝塚 26トレント土層観察表

層番号	分類	土質	土色	特徴
1	土層	-	暗褐色	10YR3/3 表土、凝灰岩片を含む (面積割合3~5%)
2	砂層	中粒砂	黒褐色	10YR2/2 直徑5~10cm程度の礫を含む (面積割合10%) 緑(3層)との境界付近に多い
3	砂層	中粒砂	暗褐色	10YR3/2 直徑5~15cm程度の礫を含む (面積割合15~20%)
4	砂層	中-細粒砂	暗褐色	10YR3/3 直徑5~15cm程度の礫を含む (面積割合7~10%) 凝灰岩片を含む
5	砂層	中粒砂	暗褐色	10YR3/3 直徑5~20cm程度の礫を含む (面積割合20%) 緑の下層に凝灰岩片を含む (面積割合15~20%)

第3表 表浜貝塚 27トレント土層観察表

層番号	分類	土質	土色	特徴
1	土層	中粒砂	暗褐色	10YR3/3 表土、凝灰岩片を一部に含む
2	砂層	細粒砂	暗褐色	10YR3/3 凝灰岩片を含む(面積割合2~3%)
3	砂層	細粒砂	黒褐色	10YR2/3 凝灰岩片を含む(面積割合2~3%)
4	砂層	中粒砂	黒褐色	10YR2/2 凝灰岩片・礫を含む(面積割合3~5%)
5	混土貝層	中粒砂	黒褐色	10YR2/2 破碎された貝殻(カキ貝体)を含む(面積割合25~30%)
6	砂層	中粒砂	黒褐色	10YR2/2 凝灰岩片を含む(面積割合7~10%) 黒褐色(25Y3/4)の粘土(8層)が埋状に入る
7	粘土層	-	黄褐色	25Y4/2 SN9、凝灰岩片を含む(面積割合3~5%)
8	砂層	中粒砂	黒褐色	10YR2/3 黒褐色(10YR3/2)の粘土質(土・粘土)が埋状に含むる 凝灰岩片を含む(面積割合2~3%)
9	砂層	細粒砂	黒褐色	10YR2/2 礫を含む(面積割合2~3%)
10	砂層	細粒砂	暗褐色	10YR3/3 同色の細粒砂が解体した一部堆積している 凝灰岩片・炭化物を含む(面積割合2%)
11	砂層	細粒砂	黒褐色	10YR2/3 破碎された貝殻を含む(面積割合20~25%) 5層の混土貝層より下にある 南側ほど貝の浸入率が低い
12	混土貝層	細粒砂	黒褐色	10YR2/2 破碎された貝殻を含む(面積割合20~25%) 5層の混土貝層より下にある 南側ほど貝の浸入率が低い
13	砂層	細粒砂	黒褐色	10YR2/2 破碎された貝殻を含む(面積割合25~30%)
14	混土貝層	細粒砂	黒色	10YR2/1 破碎された貝殻を含む(面積割合25~30%)

第4表 表浜貝塚 28トレント土層観察表

層番号	分類	土質	土色	特徴
1	土層	細粒砂	暗褐色	10YR3/4 表土、凝灰岩片を含む(面積割合3~5%) 喀灰黃色(25Y4/2)の細粒砂がSL60路と貝層6付近で認められる
2	砂層	中粒砂	黒褐色	10YR2/2 破碎された土質片・凝灰岩片・炭化物・灰白色水山床ブロック(十和田A)を含む(面積割合5~7%)
3	混土貝層	中粒砂	黒褐色	10YR2/3 灰白色水山床ブロック(3層)との境界付近に入れる
4	混土貝層	細粒砂	黒褐色	10YR3/2 破碎された貝殻・土質片・凝灰岩片・礫・褐色(10YR4/6)の細粒砂(7層の池山)を含む
5	混土貝層	中粒砂	黒色	10YR2/1 褐色の細粒砂は貝殻部に堆積する入る(面積割合10%)
6	砂層	細粒砂	黒褐色	10YR2/2 破碎された貝殻・土質片・凝灰岩片・礫・褐色(10YR4/6)の細粒砂(7層の池山)を含む
7	地山	細粒砂	褐色	10YR4/6 土質片・褐色(10YR4/6)の細粒砂(7層の池山)を含む(面積割合3~5%) 褐色の細粒砂は部分的に埋立してある(面積割合10%)、SN1145路に覆われていて
8	混土貝層	中粒砂	黒褐色	10YR2/2 北東側に向かって低くなっている 直径10cm程度の丸石を含む(面積割合~9%)
				7層とも上層は解体した貝殻付近に多く、貝殻付近に多く
				一枚貝・巻貝(カキ・ハマグリ・アカシニシ)を含む SL60路との切り合は関係はない

第5表 表浜貝塚 29トレント土層観察表

層番号	分類	土質	土色	特徴
1	土層	-	オリーブ褐色	25Y4/4 表土、大小の礫を含む(面積割合25~30%)
2	砂層	中粒砂	暗褐色	10YR3/3 盛土以前の表土、破碎された土質片・凝灰岩片を含む(面積割合3~5%)
3	砂層	中粒砂	黒褐色	10YR2/2 破碎された貝殻・土質片・凝灰岩片を含む(面積割合3~5%)
4	混土貝層	中粒砂	黒褐色	10YR2/2 破碎された貝殻・土質片・炭化物・被熱した凝灰岩・凝灰岩片を含む(面積割合15~20%)
5	砂層	粗粒砂	褐色	10YR4/6 地山

第6表 Dトレント土層観察表

層番号	分類	土質	土色	特徴
1	土層	-	オリーブ褐色	25Y4/4 表土、大小の礫を含む(面積割合25~30%)
2	砂層	中粒砂	黒褐色	10YR2/3 盛土以前の表土、破碎された土質片・凝灰岩片を含む(面積割合3~5%) 30トレント2層に付近
3	砂層	中粒砂	黒色	10YR2/1 破碎された貝殻・土質片・凝灰岩片を含む(面積割合3~5%)
4	混土貝層	中粒砂	黒褐色	10YR2/2 破碎された貝殻・土質片・炭化物・被熱した凝灰岩・凝灰岩片を含む(面積割合15~20%)
5	砂層	粗粒砂	褐色	10YR4/6 地山

第7表 表浜貝塚 31トレント土層観察表

今回の調査では、28・29トレンチを中心に炉跡や土坑、溝跡、焼土面、貝層・遺物包含層などを検出した（第5～8図）。また、26・27トレンチでは表土下から直径5～20cm程の円礫を多量に含む暗褐色～黒色の砂層を検出した。他のトレンチでは円礫を含む層は検出されておらず、遺跡に伴うもののかは不明である。各トレンチの精査後に写真撮影、遺構平面図及びトレンチ平面図、土層断面図の作成を行った。尚、遺構平面図、トレンチ平面図の測量に際しては、以下の任意に設定した測量杭（T-1～T-11）を基準点とし、電子平板による実測作業を行った。調査終了後、重機で埋め戻しを行った。

T-1 : X = -189012.080m	Y = 21375.371m	標高値：2.289m
T-2 : X = -188993.257m	Y = 21410.733m	標高値：2.644m
T-3 : X = -189017.047m	Y = 21477.039m	標高値：2.078m
T-4 : X = -189000.580m	Y = 21545.168m	標高値：2.920m
T-5 : X = -189070.649m	Y = 21392.986m	標高値：2.450m
T-6 : X = -189049.623m	Y = 21426.342m	標高値：2.889m
T-7 : X = -189087.110m	Y = 21468.281m	標高値：2.950m
T-8 : X = -189140.425m	Y = 21514.113m	標高値：2.823m
T-9 : X = -189135.205m	Y = 21519.048m	標高値：3.197m
T-10 : X = -189045.906m	Y = 21533.464m	標高値：3.412m
T-11 : X = -189063.445m	Y = 21511.140m	標高値：2.950m

（4）発見された遺構と遺物

検出された遺構には炉跡1基、土器集中遺構1か所、貝層・遺物包含層3か所、遺物集中遺構1基、火山灰集中遺構1基などがあり（第5～8図）、主要な遺構について説明する。遺物は検出した遺構や遺構外から土師器や須恵器、製塙土器、羽口など150点が出土し、このうち15点を図示した（第9図）。この他、動物遺存体（貝類・獸骨・鳥類骨・魚骨）が出土している。

S L 6 炉跡（遺構：第5・7図、遺物：第9図）※註1

29トレンチ南西側の拡張部に位置する。灰や被熱した凝灰岩、粘土、焼土、硬化面が分布する、東西約1.2m、南北約0.75mの範囲を炉跡とした。石組みを伴う炉であると考えられるが、炉の遺存状態は悪い。一部で炉跡の下層から複数の凝灰岩を検出したことから、より古い時期の炉が残存している可能性がある。遺物は炉の周辺から土師器甕や須恵器壺と考えられる破片、厚手の製塙土器片（第9図14）が出土しているが、出土量は少ない。尚、S L 6 炉跡を覆う黒褐色の砂層（2層）から出土した炭化材（コナラ属クスギ節）の放射性炭素年代測定を行った結果、11～12世紀頃の年代値が得られていることから、この年代値以前に構築されたと考えられる。

※註1：前報告（七ヶ浜町教育委員会2016）28頁の遺構配置図（第26図）には炉跡4（S L 4）が7・29トレンチに存在するが、それぞれ異なる遺構であることから本報告では29トレンチ検出の炉跡を炉跡6（S L 6）に訂正した。

S X 12 土器集中遺構（遺構：第5・7図、遺物：第9図）

29トレンチ中央部の北西壁付近、東西約0.8m、南北約0.4mの範囲から酸化炎焼成の内外無調整の土器、いわゆる赤焼土器の壺5点と高台塊1点（第9図1～6）、非ロクロ成形の土師器甕1点（第9図7）、楕円形の扁平な碟や球形の碟がまとまって出土した。出土状況から土坑に一括廃棄した状態と考えられるが、検出時には遺構のプランは確認できなかった。北西壁の堆積状況から黒褐色の混貝砂層（3・4層）の一部が浅く窓む部分が確認でき、この部分が土坑の可能性も考えられるが明瞭

ではない。

赤焼土器の壺（第9図1～5）は大半が口径12～13cm、器高3.5～4cmのもので、底部は回転糸切り無調整のものである。高台壺（第9図6）は口縁部内面に面を持ち、高台端部がやや丸い形状を呈する。内面は黒色処理が施され、底部付近は放射状ヘラミガキが施されている。土師器壺（第9図7）は口縁部が短く、胴部の屈曲が弱い形状である。胴部外面には手持ちヘラケズリ、口縁部付近はナデ調整が施されている。内外面に使用痕と考えられる黒斑が複数認められる。

貝層5（遺構：第5・6図、遺物：第9図）

28トレンチ南西端、東西約1m、南北約1mの範囲で検出した。貝層は南東と南西側のトレンチ外に広がっていると考えられる。貝層中央部にサブトレンチを設定し部分的な断割りを行ったところ、トレンチ全体に堆積する黒褐色の砂層（6層）を挟んで2層の貝層を確認したことから上部貝層（5層）を貝層5-1、下部貝層（12層）を貝層5-2と呼称した。上部貝層は黒褐色の中粒砂、下部貝層が黒褐色の細粒砂を含む混土貝層である。含まれる貝類の多くは破碎されているが、マガキを主体としてアサリ、アツエゾボラ、イガイ、イボニシ、エゾヂヂミボラ、エゾボラ、エゾボラモドキ、クロスジムシロガイ、シオフキガイ、シジミ、シロインコガイ、タマキビガイ、チョウセンハマグリ、ヒメムシロガイ、ヘソアキタボガイ、ホソウミニナ、ムラサキイガイなどが出土している。動物骨について、同定はできなかったが獸骨、魚類の破片が少量出土している。動物遺存体以外では、貝層5-1から底部外面に刻書がある土師器壺（第9図13）、輪羽口（第9図15）が出土した。

貝層6（遺構：第5・6図）

29トレンチ南西側の拡張部、SL6炉跡に隣接して検出した。検出範囲は南北約0.6m、東西約1.2mで、さらに南西側のトレンチ外に延びている。同一面で検出したが、SL6炉跡とは切り合っていない。貝層は灰白色火山灰のブロックを含む黒褐色の砂層（2層）に覆われており、ほぼ水平に堆積している。貝層中央部にサブトレンチを設定し断ち割りを行ったところ、最大厚20cmの混土貝層であることが判明した。貝層を覆う2層中から出土した炭化材の放射性炭素年代測定で11～12世紀頃の年代値が得られている。貝類はマガキ、イガイを主体として、アカガイ、アサリ、エゾボラ、オキシジミガイ、クボガイ、シロインコガイ、ハマグリ、ヘビガイ、ベッコウソデガイ、ホソウミニナ、ムラサキイガイ、巻貝の蓋などが出土している。動物骨について、同定はできなかったが獸骨、鳥類、魚類の破片が少量出土している。

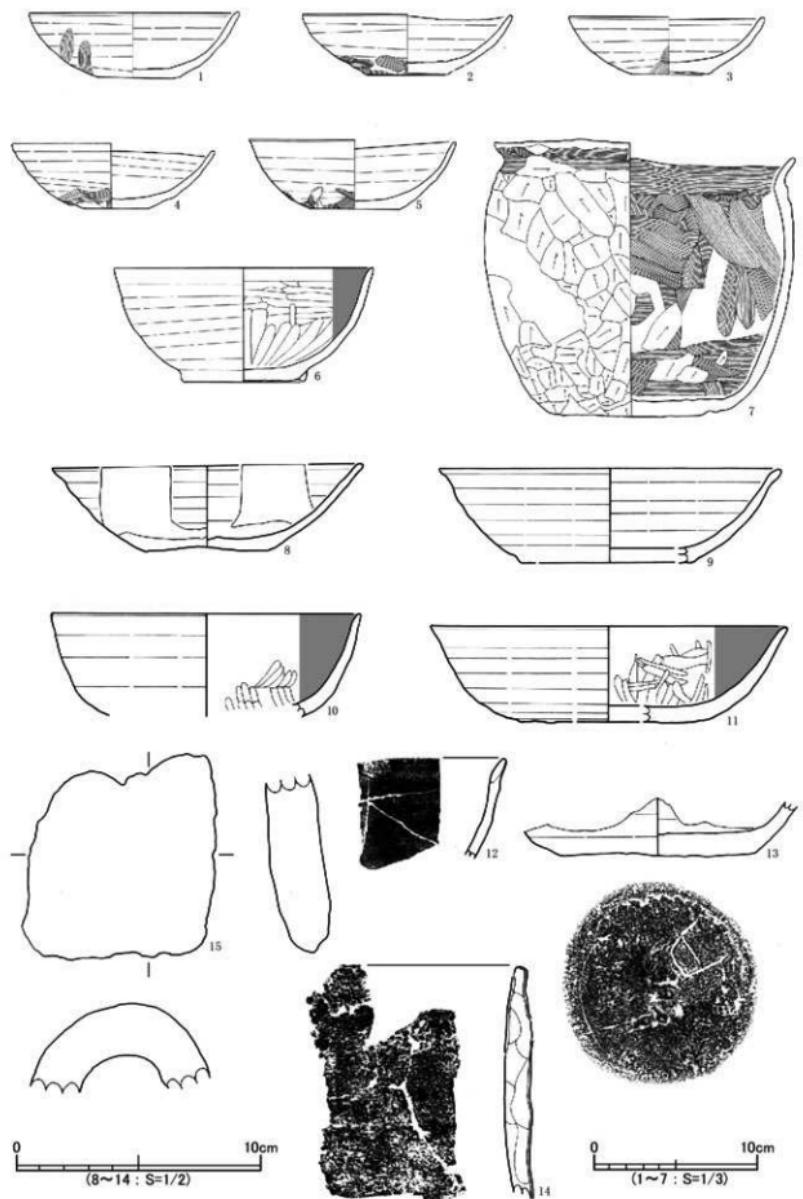
SX13遺物包含層（遺構：第5・7・8図）

30・31トレンチの地山（5層）直上で黒褐色の中粒砂内に破碎された貝殻や炭化物、被熱した凝灰岩、灰白色火山灰などを含む、最大厚は約30cmの遺物包含層を検出した。両層の含有物が共通していることから、同一の遺物包含層とした。遺物は地山境界付近から土師器壺や高台壺の破片が出土している。

SX9性格不明遺構（遺構：第5・6図）

28トレンチ北東側から黄褐色の粘土が不整形に広がる性格不明の遺構を検出した。黒褐色の砂層（6層）に覆われており、貝層5-1より古ないと考えられる。不整形の粘土の広がりは2か所あり、南西側のトレンチ外に延びている。これらを同一の遺構としたが、異なる遺構の可能性も考えられる。

SX10遺物集中遺構（遺構：第5・7図）



第9図 表浜貝塚出土土器・土製品

番号	国版番号	器種	レンチ・遺構 部位	特徴	登録番号	写真図版	縮尺
1	第9601	土師器 环	29レンチ SX12土器集中遺構 (3層)	赤燒土器 底面:回転糸切り→無調整 扁ナテ底 口径:12.9cm、高さ:4.0cm、底径:4.7cm	表浜29T-127	国版18-1	1/3
2	第9602	土師器 环	29レンチ SX12土器集中遺構 (3層)	赤燒土器 底面:回転糸切り→無調整 扁ナテ底 口径:12.8cm、高さ:3.7cm、底径:5.0cm	表浜29T-128	国版18-2	1/3
3	第9603	土師器 环	29レンチ SX12土器集中遺構 (3層)	赤燒土器 底面:回転糸切り→無調整 扁ナテ底 口径:12.0cm、高さ:3.5cm、底径:4.8cm	表浜29T-129	国版18-3	1/3
4	第9604	土師器 环	29レンチ SX12土器集中遺構 (3層)	赤燒土器 底面:回転糸切り→無調整 扁ナテ底 口径:12.4cm、高さ:4.0cm、底径:4.0cm	表浜29T-130	国版18-4	1/3
5	第9605	土師器 环	29レンチ SX12土器集中遺構 (3層)	赤燒土器 底面:回転糸切り→無調整 扁ナテ底 口径:12.8cm、高さ:4.2cm、底径:5.5cm	表浜29T-131	国版18-5	1/3
6	第9606	土師器 高台碗	29レンチ SX12土器集中遺構 (3層)	外面:コロカゼ 内面:黑色處理 マキ 底面:高台→ナテ 口径:15.4cm、高さ:6.9cm、底径:7.4cm	表浜29T-132	国版18-6	1/3
7	第9607	土師器 壺	29レンチ SX12土器集中遺構 (3層)	外面:ナベズリ ハラナギ、ナテ、潤離 内面:ハラケズリ、ヘタナギ、ナテ、底面:ヘタナギ 口径:18.5cm、高さ:17.0cm、底径:8.3cm	表浜29T-133	国版18-7	1/3
8	第9608	土師器 环	29レンチ 3層	赤燒土器 底面:回転糸切り→無調整 口径:(12.9cm)、高さ:3.5cm、底径:(5.2cm)	表浜29T-134	国版18-8	1/2
9	第9609	土師器 环	29レンチ 3層	赤燒土器 口径:(14.1cm)、高さ:3.9cm、底径:(7.2cm)	表浜29T-135	-	1/2
10	第9610	土師器 环	29レンチ 3層	外面:リコロナギ、縦刷 内面:黑色處理	表浜29T-136	-	1/2
11	第96011	土師器 环	29レンチ 5層	外面:リコロナギ 内面:黑色處理 マキ	表浜29T-137	-	1/2
12	第96012	土師器 环	29レンチ 6層	内面:黑色處理 マキ 底面:手持毛ヘラケズリ 口径:(14.7cm)、高さ:3.9cm、底径:(7.2cm)	表浜29T-138	国版18-9	1/2
13	第96013	土師器 环	29レンチ 5層	内面:コロカゼ 実面:ヘタ切り→ナテ、新面(焼痕前:ヘラ書き) 口径5.1 (5層)	表浜28T-1	国版18-10	1/2
14	第96014	製塩土器	SL6010 (2層)	内外面:ナテ 潤離 海綿状骨針含有	表浜29T-139	国版18-11	1/2
15	第96015	羽口	28レンチ 且層5 (5層)	外面:ナテ	表浜28T-2	国版18-12	1/2

第8表 表浜貝塚出土遺物觀察表

29レンチ S X12土器集中遺構の東側、0.4m × 0.45m の範囲に焼土や貝類などが集中する範囲を遺構として認定した。検出面は S L 6 炉跡や貝層 6 と同一面の 2 層中である。焼土を主体として破碎された貝類、土師器や製塩土器の破片、炭化物、鉄滓を含んでいる。同定できた貝類はアサリ、イガイ、シジミ、ヒメエゾボラ、ヘソアキクボガイ、ヘンワゴマガイ、マガキ、レイシガイなどがある。

S X11火山灰集中遺構（遺構：第5・7図）

29レンチ S X10遺物集中遺構の北側、0.25m × 0.3m の範囲に灰白色火山灰のブロックが集中する範囲を遺構として認定した。検出面は 5 層中である。灰白色火山灰以外に少量の土師器や破碎された貝類が出土した。

(5) 考察

A. 遺構の特徴と集落の様相

震災復興事業（都市公園整備）に伴う調査（5～8次調査）では、炉跡 6 基、土坑 1 基、土器集中遺構 1 か所、貝層・遺物包含層 8 か所、溝跡 1 条、土器集中遺構などの遺構計 8 基を検出した。これらの遺構は遺構検出面の層位や遺構堆積土、出土遺物などから古墳時代後期～平安時代のものと推定される。また、これらの遺構は遺跡中央部から南側に集中しており、遺跡北側からの検出は少ない。

【炉跡】

炉跡は遺跡中央部や南側を中心に計 6 基検出した。2・3 次調査においても計 5 基の炉跡を検出している（第10・11図）。炉跡は凝灰岩を伴うが、その多くが被熱により赤変しており、製塩などの作業で頻繁に使用されたと考えられる。炉跡に伴う遺物が少なく、時期を特定することは難しいが、その多くは平安時代に位置付けられると考えられる。2 トレンチで検出された S L 1・2 炉跡（第8図）は南北方向に長軸を持ち、被熱した石組みを伴う炉跡である。S L 1 炉跡は長軸約 1.6m、最大幅約 0.9m、S L 2 炉跡は長軸約 1.3m、最大幅約 0.9m を測る。S L 2 の南側に浅いくぼみ（S X 2）を検出しておらず、S L 2 に伴う遺構の可能性がある。5～8 次調査で検出した炉跡は炉石が原位置から移動

1次調査 1トレーンチ

A A' B B'



1. A A' B B'

2. A A' B B'

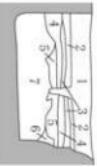
3. A A' B B'



1次調査 2トレーンチ

C C' D D'

D D' C C'

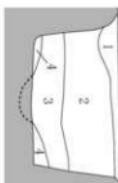
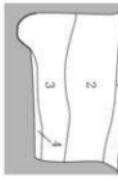


A A' B B'

B B' C C'

D D' E E'

2次調査 遺構配置図



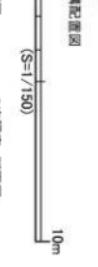
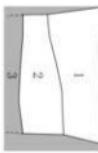
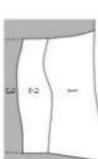
SL11
SL12

SL13

SL14

SL15

SL16



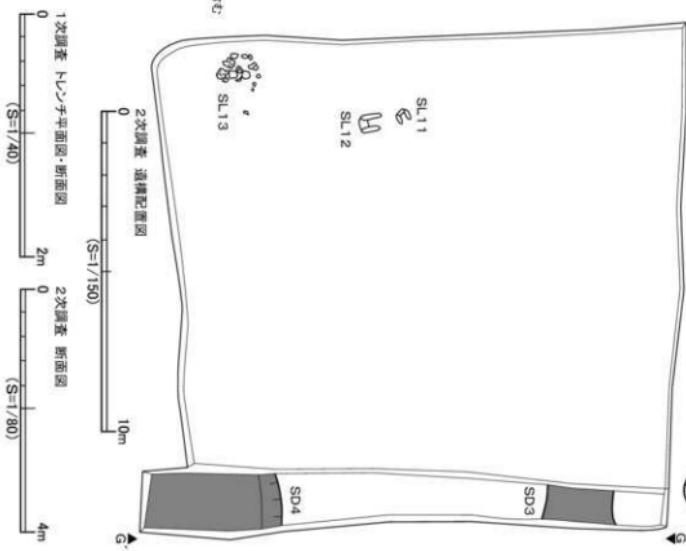
2次調査 調査区東壁

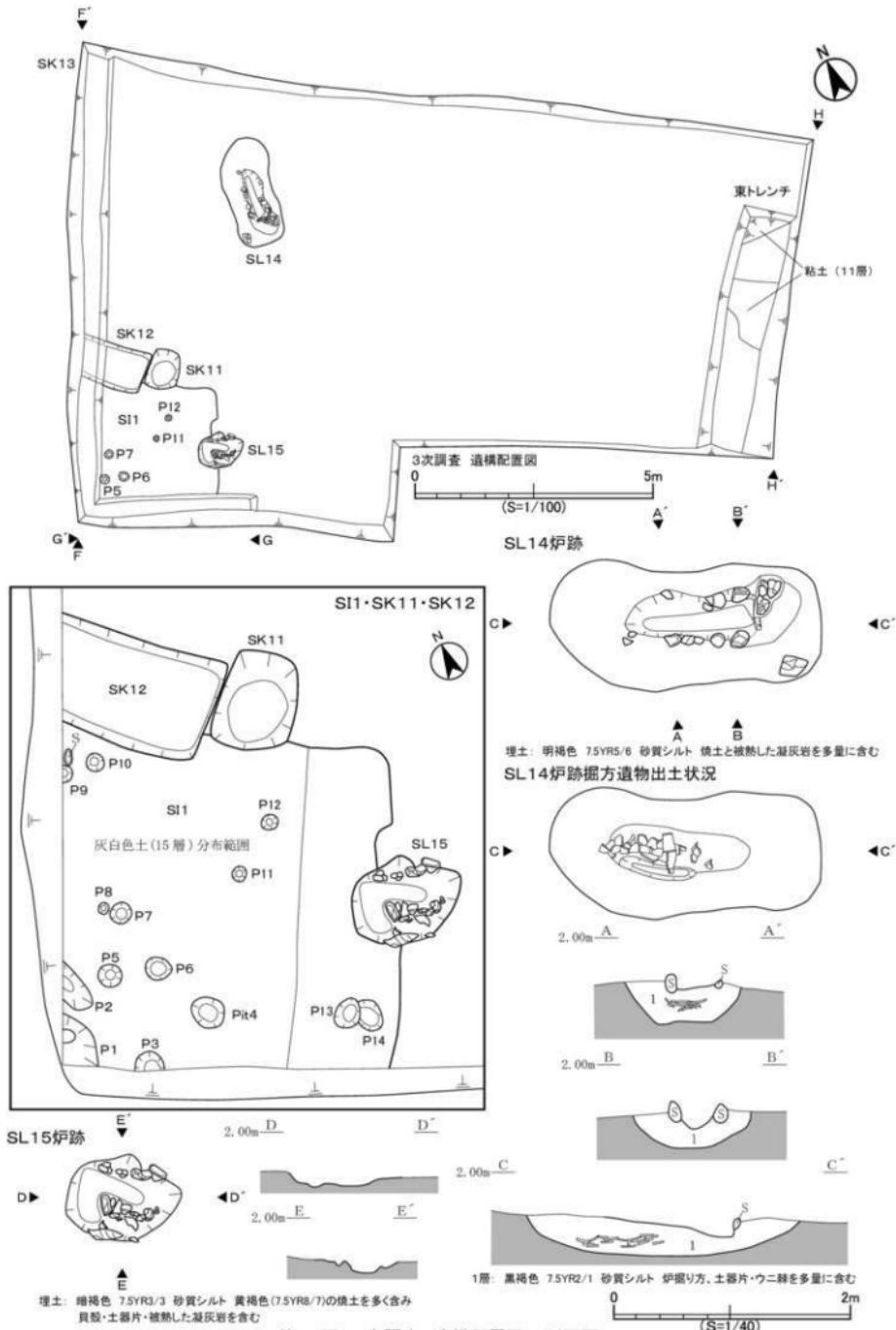
SD3

第10図 1・2次調査 遺構配置図・断面図

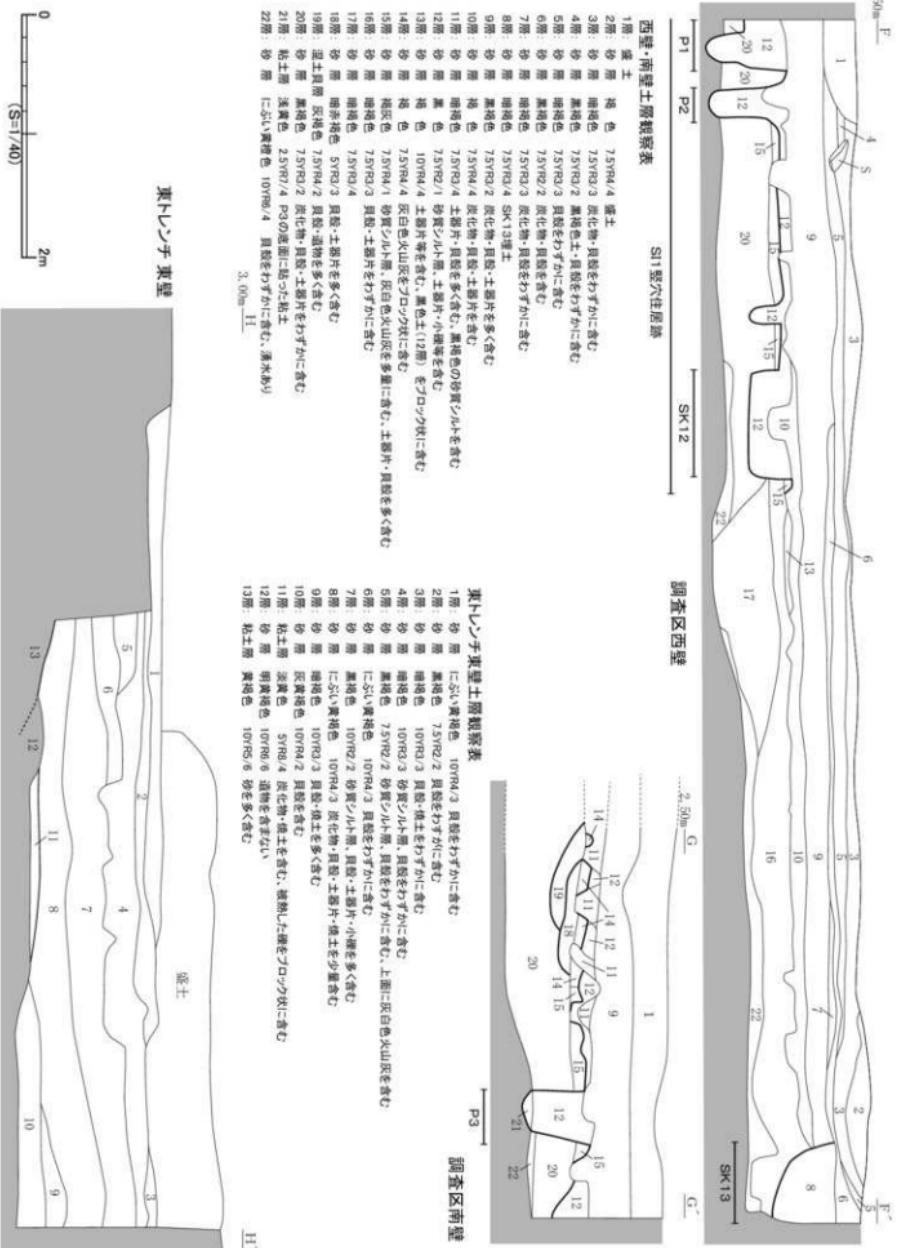
SD4

18

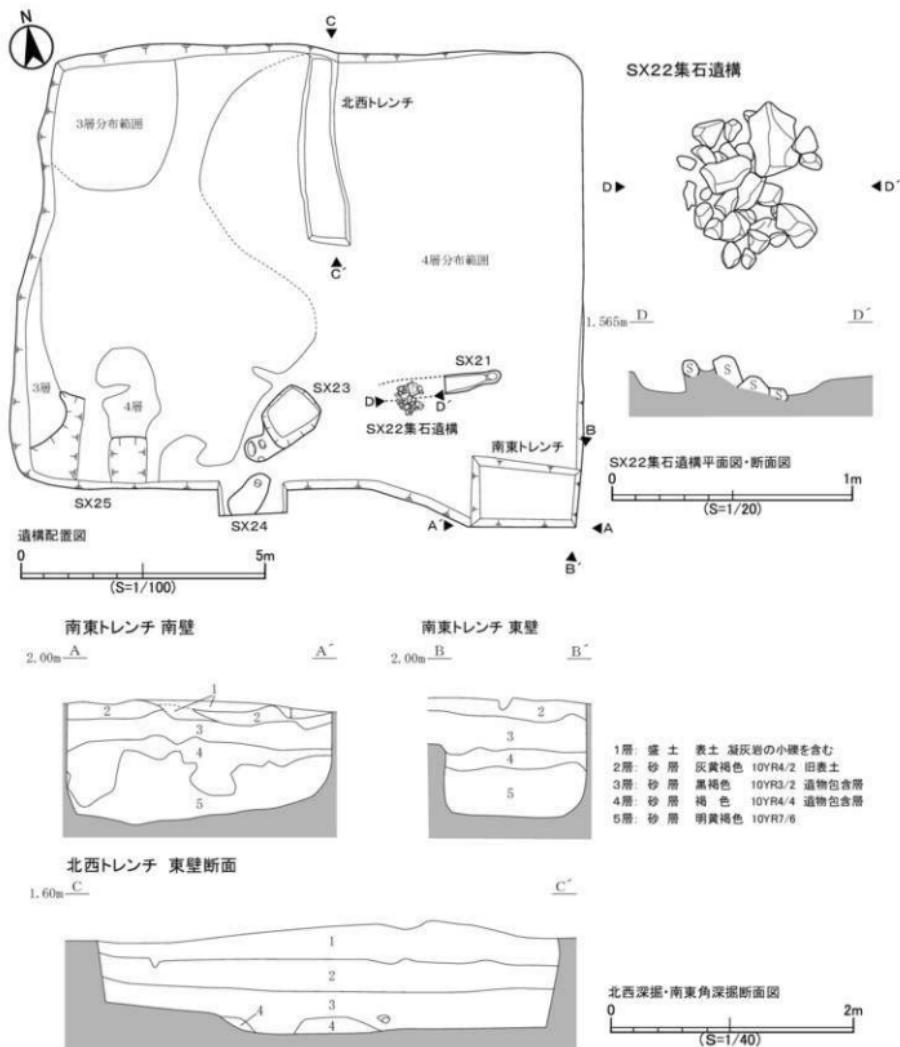




第11図 3次調査 遺構配置図・断面図



第12図 3次調査 調査区断面図



第13図 4次調査 遺構配置図・断面図

しているものが多い。人為的な解体、または災害や後世の擾乱を受けたためと考えられる。

【貝層・遺物包含層】

貝層は8トレンチを中心にして計7か所、30・31トレンチで遺物包含層1か所確認した(第5図)。貝層は古墳時代後期～平安時代の複数時期の遺物が出土するものや動物遺存体以外の遺物がほとんど出

土しないものがあり、時期の特定が難しいものが多い。その一方で8トレンチ貝層2・3と貝層4のように堆積層の上下で検出され、時期差を把握できる貝層もあった。貝層2・4では関東系土師器の在地模倣品と考えられる壺や壺が出土しており、7世紀後半～8世紀の貝層と考えられる。また、貝層2・4から鹿角製の複合釣針（擬飼針）の未製品やシカ中手・中足骨製の骨鏃が出土しており、狩獵や漁撈などと関連がある遺物も出土している。また、遺跡北側の7・10トレンチでは、破碎された貝類や古代の遺物を含む砂層が遺構面や地山を覆う状況が確認された。検出された貝層の多くは複数の貝類を含むが、特にイガイとカキを主体とする貝層が多く、貝類の選択的な採取が行われていたことを示している。

【豊穴住居跡】

今回の調査では居住施設は確認されなかったが、3次調査で豊穴住居跡（S I 1）1棟を検出している（第11図）。S I 1 豊穴住居跡は3次調査区の南西角から南北約28m、東西約28mの範囲が検出された。住居北東角を検出したが、住居は西・南側の調査区外に延びている。北壁をSK11・12土坑に切られている。住区内で検出されたピットのうちP 1～3はその深さから柱穴跡と考えられる（第12図）。P 3では砂質の地山に柱を安定して設置するため、底面に浅黄色（2.5Y7/4）の粘土（21層）を貼って基礎としている。床面に灰白色火山灰を多量に含む褐灰色（7.5YR4/1）の砂層が堆積しており、柱穴はこれを掘削して構築している。このことから住居跡は灰白色火山灰（十和田a火山灰）降下（915年頃）以降に構築されたと考えられる。しかし、S I 1 豊穴住居跡やS L 15炉跡からは9世紀中葉の遺物も出土しており、より詳細な検討が必要である。

【土器集中遺構】

S X12土器集中遺構は29トレンチ中央部の北西壁付近、東西約0.7m、南北約0.8mの範囲から酸化炎焼成の内外無調整の土器（赤焼土器）の壺5点、高台塊1点、非クロコ成形の土師器甕1点、楕円形の扁平な碟や球形の碟がまとまって出土した。土坑に一括廃棄した状態と考えられるが、遺構のプランは確認できなかった。出土した土器のうち、赤焼土器については底部回転糸切り無調整で、口径12～13cm、器高3.5～4cm、底径4.5～5.5cmのもので、底径：口径比は平均0.38である。今回出土した赤焼土器については、その法量、口径10cm程度の小型の壺類が伴っていない点からすると高橋透氏の分類（高橋2018）のE 2群（10世紀後半）に相当すると考えられる。高台塊については、山王遺跡千刈田地区S X543（SK543）（多賀城市教育委員会1991・高橋分類E 1群（10世紀前半））では同様の形態が見られること、一段階新しいと考えられる多賀城跡鴻ノ池地区S B3181-N 1W2出土資料（宮城県多賀城跡調査研究所2014）から本資料と類似する塊が出土していることから、E 2群に位置付けられると考えられる。土師器甕は高橋分類のE 1群・2群では明確な型式差が認められないが、一括廃棄による資料とするE 2群に位置付けられる可能性が高い。以上のことからS X12土器集中遺構は高橋分類のE 2群相当の10世紀後半に位置付けられると考えられる。

【その他の遺構】

1～8次調査において4条の溝跡を検出している。検出している範囲が狭いことから規模や用途は不明であるが、2トレンチのSD1溝跡は他の溝跡に比べて小規模であることから、SL1・2炉跡やSK1土坑に関連する排水溝のような設備であると考えられる。また、硬く縮まった硬化面や黄褐色の粘土が不整形に広がる性格不明の遺構（SX5・9）、焼土や貝類、灰白色火山灰などを集中する遺構（SX1・7・8・10・11）などを検出しているが、時期を特定できるものは少ない。

【集落の様相】

これまでに行われた調査はトレンチによる限定期的な調査であるため、確認された遺構や遺物は遺跡全体のごく一部分に限られている（第4～8・10・11・13図）。出土遺物は複数時期の遺物が混在する堆積土中から出土したものが多いため、7世紀後半～11世紀中葉頃と考えられる土師器や須恵器、赤

焼土器、製塙土器、骨角製品、鉄製品、動物遺存体などが出土している。土器類では関東系土師器坏やこれを模倣した土師器坏、「宮本」の刻書土器、櫛状痕を持つ土器片、骨角製品や鉄製品では開窓式離頭鉗や複合釣針（擬飼針）、骨鏃、卜骨、鉄鏃、刀子などが出で、表浜貝塚を特徴付ける遺物が複数確認されている。製塙土器では在地の厚手で円筒形の製塙土器に加え、三河湾沿岸地域系統の特徴を有する製塙土器が1点出土している（第14図1）。同様のものは長須賀遺跡においても出土しており（第14図2）、三河湾沿岸地域由來の製塙土器が七ヶ浜半島内で面的な広がりを持っていることが分かった。また、S11堅穴住居跡が灰白色火山灰降下以降の住居とすれば、表浜貝塚が10世紀後半段階に居住域を持つ集落として機能していた可能性が高い。さらに2次調査でSL13炉跡などから口径9~10cm前後、器高1.5~2cm前後の高台皿が複数出土している（第10図・写真図版5-②）。これらは高橋分類（高橋2018）のF群に相当する10世紀末から11世紀中葉頃に位置付けられると考えられ、11世紀以降も集落として機能していた可能性も高いと言える。

これまでの調査により不明であった奈良時代以前や10世紀代の七ヶ浜半島における人々の動向の一端が明らかになったことは大きな成果である。また、当集落の墓域と考えられる高山横穴墓群の調査成果（七ヶ浜町教育委員会2016）、延喜式内社鼻節神社や「国府厨印」の存在などを総合すると、製塙や漁撈・加工作業など生産活動の拠点として、長期にわたって営まれた集落であると同時に、陸奥国府多賀城や関東・東海地方と深い繋がりを持っていたことを示しており、当集落が古代の七ヶ浜半島南部における核的な集落であることが明らかになった。

B. 松島湾周辺の古代製塙の様相

宮城県では古墳時代を除く、製塙土器が出土または採取される、縄文～平安時代の遺跡が180か所確認されており（小井川・加藤1988）、縄文時代晩期と平安時代（9世紀代）のものが主体である。これまで県内では古墳時代の明確な製塙遺跡は確認されておらず、縄文時代から続く塙生産に現状では断絶期が生じている。東北地方の古代製塙に関する遺跡や遺構、製塙土器に関する集成はこれまでに加藤道男や高橋透によって行われている（加藤1989・高橋2013）。加藤は仙台湾周辺の縄文～平安時代の製塙遺跡、製塙土器の集成と考察を行い、高橋は太平洋沿岸の奈良・平安時代の製塙遺跡の集成や製塙遺構、製塙土器の考察を行っている。

松島湾沿岸は古代の製塙遺跡の密集地域であるが、その分布状況から①宮戸島・浦戸諸島遺跡群（里浜貝塚、江ノ浜貝塚など）、②松島湾奥部遺跡群（西の浜貝塚、館ヶ崎遺跡、瑞巖寺境内遺跡など）、③塙釜港北部遺跡群（新浜B遺跡など）、④七ヶ浜半島北部遺跡群（水浜遺跡など）、⑤七ヶ浜半島南部遺跡群（表浜貝塚、長須賀遺跡など）の5つの遺跡群に分類できる（苔原2020）。松島湾内では9世紀以降に七ヶ浜町水浜遺跡や松島町瑞巖寺境内遺跡など検出事例が増加するが、奈良時代に属するものは少ない。奈良時代の遺構としては塙龜市新浜B遺跡の1・2号炉（8世紀後半）が最も古く、最古の製塙土器出土例は東松島市亀岡遺跡のS101住居跡から出土した8世紀中葉頃のものである。製塙炉の平面形は長楕円形、楕円形、円形、長方形があり、炉壁面に凝灰岩を並べるものや浅い掘り込みを持つもの、炉底面が石敷きのものなど複数のタイプが存在する。9世紀以降は遺構検出数に比例して製塙土器の出土量も増加し、多賀城市山王遺跡や市川橋遺跡など10世紀代まで確認できる。松



第14図 他地域の特徴を有する製塙土器片

島湾周辺では8世紀代にすでに湾内に遺跡が点在しており、8世紀末から9世紀初頭以降に遺跡数が急増し、10世紀代まで継続している。

近年、東松島市江ノ浜貝塚や女川町崎山遺跡などから古代の製塩について新たな成果が得られている。江ノ浜貝塚では入江に面する標高約2mの微高地から9世紀代の製塩炉が5基検出されている（菅原2019）。特筆すべきは①凝灰岩を用いた石組み炉と漆喰状の炉が存在し、石組み炉から漆喰状の炉へと変遷する可能性があること、②厚手大型と薄手小型の製塩土器が異なる地点から出土し、作業場所（炉）ごとに使い分けられていた可能性があること、③炉や周辺の堆積土中から多數の被熱した微生物遺存体（ウスマキゴカイ）が検出され、製塩過程で「藻灰」が利用されていた可能性があることである。製塩土器の使い分けや藻灰の利用は、不明な点が多い塩の生産工程を解明する大きな成果である。また、石帯やト骨が出土しており、松島湾周辺の塩生産が陳奥国府多賀城や関連施設の管理下で行われていた可能性も示している。崎山遺跡では堅穴住居跡から県内最古の製塩土器（8世紀前半）が出土した。これまで北上川下流域や牡鹿半島では8世紀末～9世紀初頭以降に塩生産が活発化する（高橋2013）とされていたが、8世紀代には松島湾周辺と同様に開始されており、両地域が連動していることが明らかになった。平成24・25年度の表浜貝塚と長須賀遺跡の調査において、三河湾沿岸地域で出土する棒状脚を持つ製塩土器片（第14図1・2）が出土した。これらはその特徴から8世紀代の知多式4A1類または2類（立松2010など）に相当すると考えられる。現状、宮城県内において他地域の製塩土器出土例が乏しいことから三河湾沿岸部の資料と比較・検討がさらに必要であるが、8世紀代に松島湾の塩生産において、他地域の技術が導入されていた可能性がある。また、古墳時代の断絶期以後の塩生産の復活にあたり、他地域の技術が導入されたという仮説もあり立ち、検討する必要があるだろう。

宮城県内の古代の製塩について、新たな資料や知見が出てきたことにより、塩の生産工程や製塩技術の系譜、国府や城柵と製塩遺跡との関係性、塩の流通過程など、より多角的な視点での検討と議論が必要となっている。

（6）まとめ

5～8次調査の成果を受け、都市公園整備では町道天神堂線に埋まれた遺跡中心部は散策路と植栽による整備とし、駐車場や公衆トイレ、広場などの便益施設は遺構の分布密度が低い遺跡北側と西側に整備することとなった（巻頭写真3）。さらに炉跡や土器集中遺構などを検出した29トレンチ周辺は厚さ2m以下の盛土と緑化で遺構の保護措置を講じた。また、令和元年度には調査成果と遺跡周知のため、公園内に表浜貝塚と高山横穴墓群の解説板を各1基設置した。

第2節 土浜A・B貝塚（第15・16図、写真図版6・7）

（1）遺跡の概要

土浜A・B貝塚は七ヶ浜町代ヶ崎浜字土浜地内に所在する縄文時代晚期及び平安時代の貝塚・生産遺跡である（第15図）。遺跡は塩釜港に開く入江状の浜辺から標高約20mの丘陵裾部にかけて立地し、現況は宅地と畠地である。これまで詳細な調査は行われていないが、周辺から縄文時代晚期の土器や土師器、須恵器などが採取されており、カキを主体とする貝層が確認されている。かつて浜辺ではカキ殻を原料として生石灰を製造するための貝殻焼き用のカマドがあったとされ（村主1928）、周辺で確認されるカキを主体とする貝層の一部はこうした近現代に生石灰用に集められたものである可能性が高い。遺跡南側の丘陵を越えると平安時代の堅穴住居跡や製塩遺構などが検出され、縄文時代晚期や弥生時代中期、平安時代の遺物が出土した水浜遺跡が所在している（七ヶ浜町教育委員会1993）。



第15図 土浜A・B貝塚の位置と周辺の遺跡

土浜A・B貝塚

所在地	時代
七ヶ浜町代ヶ崎浜字土浜	縄文晚期・平安
遺跡番号	過去の調査歴
20022	なし
20023	貝塚 丘陵斜面 生産遺跡 低地
検出遺構等	遺物包含層
出土品	縄文土器・弥生土器・土器類・須恵器・製塙土器ほか

周辺の遺跡

- 2: 二月田貝塚（縄文・弥生・古代）
- 15: 清水洞窟貝塚（弥生・古墳・古代）
- 18: 水浜遺跡（縄文・弥生・古代）
- 19: 神明遺跡（古代） 20: 影田貝塚（古代）
- 27: 汝上貝塚（縄文） 28: 峯貝塚（縄文・古代）
- 31: 清水貝塚（縄文・弥生・古墳・古代）
- 40: 水浜横穴墓（古代）
- 41: 沢尻貝塚（縄文・弥生・古代）



第16図 トレンチ配置図

(2) 調査要項

遺跡名 土浜A・B貝塚 (宮城県遺跡地名表登録番号 20022・20023)

調査地 七ヶ浜町代ヶ崎浜字土浜地内

調査原因 防潮堤改修

調査担当 田村正樹 (七ヶ浜町教育委員会)

調査期間 平成28 (2016) 年11月29日～12月7日

対象面積 (事業面積) 812.35m² 調査面積 19.2m²

(3) 調査の概要と成果

平成28年度に宮城県仙台塙釜港湾事務所より代ヶ崎浜土浜地区の防潮堤を改修する計画が示された。既存防潮堤とはほぼ同位置に同型の防潮堤を整備する計画であるが、堤防基部の幅が既存より大きく、陸側で新たな掘削を伴うものであったことから、遺構・遺物の有無を確認するために確認調査を実施した。既存防潮堤の陸側にトレンチ3本(1~3トレンチ)を設定し、重機を使用して掘削を行った(第16図)。掘削後に写真撮影、土層堆積状況の観察・記録を行った後に、重機で埋め戻しを行った。

1 トレンチ

1 トレンチ(2m×3.3m)は既存防潮堤の南東側に設定した。3本のトレンチでは最も南側に位置する。掘削途中でトレンチ床面からの著しい湧水を確認したため、表土下約1.1mで掘削を止めた。表土下は擾乱を受けており、既存防潮堤の基礎設置の際に掘削された可能性が高い。

2 トレンチ

2 トレンチ(2.3m×2.3m)は既存防潮堤の中央部に設定した。1 トレンチ同様に掘削途中で著しい湧水を確認したため、表土下約1.1mで掘削を止めた。トレンチ南東壁から切石列を検出した(写真図版6-⑦・⑧)。切石には溝状の加工痕を残すものがあった。切石の下には柱材と考えられる木材と近現代のごみを含む土層、破碎されたカキを主体とする貝層を確認した(写真図版7-①)。貝層は焼土や被熱した凝灰岩の他、現代の瓶などを含んでいることから近現代のものと考えられる。

3 トレンチ

3 トレンチ(2m×3.1m)は防潮堤北東側に設定した。トレンチ北東壁・北西壁の表土直下からコンクリートを検出した。北東壁のコンクリートは3層あり、厚さは上層から10cm、30cm、8cmである。北西壁は2層あり、厚さは上層から15cm、6cmである。コンクリートの下からはカキを主体とする貝層を検出しがた(写真図版7-⑥)、現代の瓶などを含んでいることから2 トレンチ同様に近現代のものと考えられる。

(4)まとめ

計画地に隣接する浜辺で大洞B式の破片を1点採取したが、1~3 トレンチでは土浜貝塚に関する遺構や遺物は確認されなかった。浜辺付近は既存の防潮堤により削平や擾乱を受けていることが判明した。以上のことから、計画地は遺跡との関わりがないと考えられ、当初の計画通りに実施して問題がないと判断した。尚、過去の航空写真(1952年・国土地理院)では今回の調査地点付近に建つ2棟の建物が確認できる。2・3 トレンチで検出された切石列やコンクリートは、この建物の基礎や貝殻焼き用カマド(村主1928)に関するものと考えられる。

第3節 阿川沼貝塚 (第17・18図、写真図版8・9)

(1) 遺跡の概要

阿川沼貝塚は七ヶ浜町菖蒲田浜字小塚・新小塚地内に所在する縄文時代晚期・弥生時代中期の貝塚・製塙遺跡である(第17図)。阿川沼西側の丘陵及び低地に立地し、現況は水田と畑地である。丹治栄一氏が発見し、紹介している小塚貝塚(丹治1969)はこの阿川沼貝塚と同一と考えられる。平成26年度には農山漁村地域復興基盤総合整備事業による暗渠排水管埋設、排水溝改修、水田区画整理工事に伴い、阿川沼西側の水田において確認調査を実施したが、遺構・遺物は確認されなかった(七ヶ浜町教育委員会2016)。

(2) 調査要項

遺跡名 阿川沼貝塚(宮城県遺跡地名表登録番号 20007)



第17図 阿川沼貝塚の位置と周辺の遺跡



第18図 トレーンチ配置図

番号	分類	土質	土色	特徴
1	土層	砂質シルト	暗褐色	10YR3/4
2	土層	砂質シルト	オリーブ色	5Y5/6
3	土層	粘質シルト	暗褐色	10YR3/4
4	土層	粘質シルト	褐色	10YR4/4
5	砂層	オリーブ色	5Y5/6	炭化物を含む。下層では5層の粘質シルトが混じる部分がある

第9表 阿川沼貝塚 7トレーンチ土層観察表

番号	分類	土質	土色	特徴
1	土層	シルト	黒褐色	10YR2/3
2	土層	シルト	褐色	10YR4/4 洋十数cm程の釋、褐色 (7.5YR4/6) の土粒を含む (面積割合1~2%)

第10表 阿川沼貝塚 8トレーンチ土層観察表

調査地 七ヶ浜町菖蒲田浜字小塙地内

調査原因 通学路（歩道）整備

調査担当 田村正樹（七ヶ浜町教育委員会）

調査期間 平成29（2017）年2月14日

対象面積（事業面積） 4.053m² 調査面積 6.3m²

(3) 調査の概要と成果

平成28年度に町建設課より町道久保線沿いに幅員2.5mの歩道を整備する通学路（歩道）整備計画が示され、遺跡範囲の一部が法面掘削を行う場所にあたることが判明した。これを受けた遺構・遺物の有無を確認するために確認調査を実施した。掘削箇所にトレンチ2本（7・8トレンチ）を設定し（第18図）、重機を使用して掘削を行った。尚、トレンチ番号は今回の調査地点が平成26年度の調査地点に隣接することから、前回のトレンチ番号と連続するように付した。掘削後に写真撮影、土層堆積状況の観察・記録を行った後に重機で埋め戻しを行った。

7 トレンチ

7トレンチ（15×3m）は丘陵平坦面に設定し、重機で約65cm掘削した（写真図版8-⑤～⑦）。トレンチ東側は農業用ハウスが隣接している。堆積層は5層確認し（第9表）、表土下約35cmでオリーブ色（5Y5/6）の地山（5層）を検出した。地山は砂と粘質シルトの互層で構成され、上層ほど粒径が大きい。表土下から地山までの間には3層の堆積土を確認したが、表土直下の2層は地山（5層）の再堆積層である。2層と3層の間にはビニール袋が含まれていた。遺構・遺物は確認されなかった。

8 トレンチ

8トレンチ（1×3m）は7トレンチ北西側の丘陵緩斜面に設定し、重機で約65cm掘削した（写真図版9-①・②）。堆積層は2層確認し（第10表）、表土下約20cmで褐色（10YR4/4）の地山（2層）を検出した（写真図版9-④）。表土には大量のごみを含んでいる。遺構・遺物は確認されなかった。

(4)まとめ

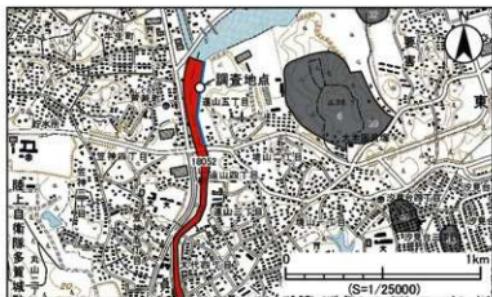
今回の調査では、阿川沼貝塚に関する遺構・遺物は検出されなかった。表土直下の状況から後世の造成により地形が大きく改変されていることが判明した。今回の調査地は遺跡との関わりが低いと考えられるため、当初の計画通りに実施して問題がないと判断した。

第4節 貞山堀（第19・20図、写真図版10・11）

（1）遺跡の概要

貞山堀は開削年代が異なる「御舟入堀」、「新堀」、「木曳堀」の3つの運河の総称である。最初に開削されたのは阿武隈川河口と名取川河口の間に結ぶ運河の「木曳堀」で、慶長2～6（1597～1601）年頃に開削された。続いて、塩竈市牛生から仙台市宮城野区蒲生を結ぶ「御舟入堀」が万治元年～寛文13・延宝元年（1658～1673年）に開削された（第19図）。最初に仙台藩士の佐々木只夫により牛生から多賀城市大代間に開削され、その後に大代から蒲生までの開削工事に着手したが困難を極めたとされる。御舟入堀が完成した寛文13年の年代は、この工事を担当した和田房長が鹽竈神社に奉納したとされる石灯籠の願文に基づくものである。藩政時代はこの2つの運河が仙台藩の水運を担っていたが、全水路が開通するのは明治5（1872）年に名取川と七北田川までを結ぶ「新堀」が開削されてからである。「貞山堀」の名称は、明治14（1881）年に当時の宮城県土木課長の早川智寛によって命名されたもので、明治期の大改修工事開始直後のことである。その後、明治22（1889）年に告示された「運河取締規則」によって、御舟入堀、新堀、木曳堀に加え、石巻市石井閘門から東松島市東名までの北上運河と東名運河を含めた「貞山運河」の名称に改称された。

これまで貞山堀に関する調査事例は少ないが、近年仙台市宮城野区蒲生地区において測量調査や発掘調査が行われている。平成20年度には、昭和10（1935）年に施工された蒲生北閘門前面の石積護岸の測量調査が行われ（仙台市教育委員会2010）、平成27・28年度には被災市街地復興土地区画整理事業に伴う調査で舟溜り跡の護岸や蒲生御蔵を開む溝跡が検出されている（仙台市教育委員会2018）。



第19図 貞山塚の位置と周辺の遺跡

—■—：整備計画範囲

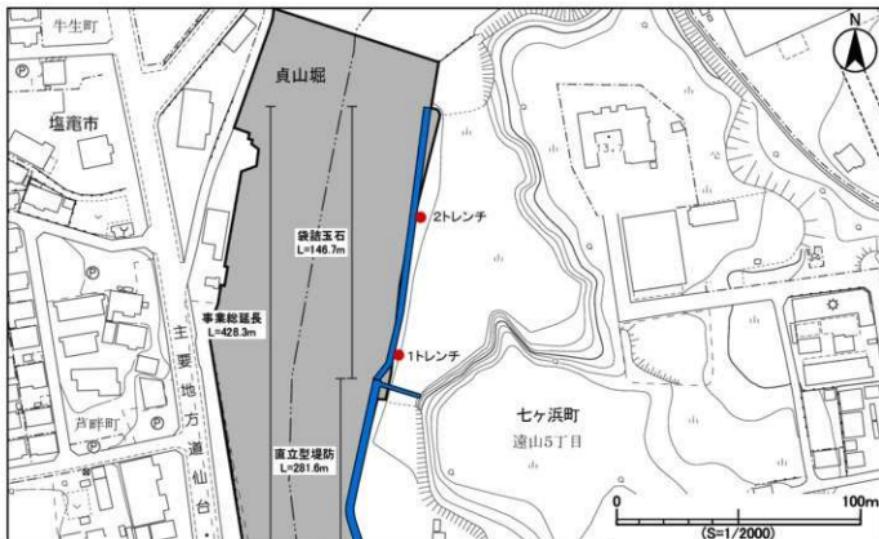
貞山塚（御舟入堀）

所在地	時代		
七ヶ浜町遠山五丁目ほか	近世・近代		
遺跡番号	過去の調査歴	種別	立地
18052	2013・15・16年	運河	浜堤・低地
検出構機等	船溜まり跡、石積み護岸ほか		
出土品	陶磁器、瓦、木製品、土製品ほか		

*七ヶ浜町内における調査事例がないため、仙台市・多賀城市内での調査歴及び遺物・出土品を表記

周辺の遺跡

- 6 : 大木團貝塚（縄文） 32 : 左道遺跡（縄文・奈良・平安）
- 39 : 大木城跡（中世）
- 43 : 鬼/神山（野山）貝塚（縄文・弥生）
- 46 : 野山遺跡（縄文・弥生）



第20図 トレンチ配置図

層番号	分類	土質	土色	特徴
1	砂層	粗粒砂	暗オリーブ褐色	2.5Y3/3 鐵、カキ殻を含む
2	砂層	粗粒砂	暗オリーブ灰色	2.5GY4/1 葦の地下茎・樹根・大型繊を含む
3	土層	粘質シルト	褐色	10YR4/6

第11表 貞山塚 1トレンチ土層観察表

層番号	分類	土質	土色	特徴
1	砂層	粗粒砂～粗粒砂	灰黃褐色	10YR4/2 粗粒砂と粗粒砂の互層（6層分）、根・貝殻を含む（面積割合3~5%）
2	砂層	粗粒砂	オリーブ褐色	2.5V4/4 直径5~6cm程の鐵を含む

第12表 貞山塚 2トレンチ土層観察表

(2) 調査要項

遺跡名 貞山堀（宮城県遺跡地名表登録番号 18052）
調査地 七ヶ浜町遠山5丁目地内
調査原因 護岸整備
調査担当 田村正樹（七ヶ浜町教育委員会）
調査期間 令和元（2019）年10月30日・31日
対象面積（事業面積） 2,140m² 調査面積 3.4m²

(3) 調査の概要と成果

令和元年度に宮城県仙台土木事務所より七ヶ浜町遠山5丁目地内の貞山堀東岸において、鋼矢板及び袋詰玉石による護岸新設工事の計画が示された。これを受けて宮城県教育庁文化財課、宮城県仙台土木事務所、町教育委員会生涯学習課文化財係の三者で令和元年10月に計画地の現地確認を行った。その際、計画地北側の岸辺に水面から露出する石積み列を確認した（写真図版10-②～④）。このため、石積み列の性格把握と計画地内での貞山堀に関する造構・遺物の有無を確認する必要があると判断し、確認調査を実施した。調査地点は塩釜港側の貞山堀東岸で、現状は砂浜状の岸辺となっている。この場所にトレンチ2本（1・2トレンチ）を設定し（第20図）、人力で掘削を行った。掘削後に写真撮影、土層堆積状況の観察・記録を行った後に人力で埋め戻しを行った。

1 トレンチ

1トレンチ（1.1m×1.2m）は岸辺南側、干潮時の汀線付近より陸側に設定した。石積み列とは約1.3m離れている。人力で約40cm掘削したが、トレンチ床面からの湧水や船の往来による波で水没するため、これ以上の掘削は困難であった。堆積層は2層確認した（写真図版11-①、第11表）。表土（1層）は暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）の極粗粒砂層、2層は暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）の粗粒砂層で、2層には葦の地下茎、樹根、大型礫を含んでいる。トレンチ底面は褐色（10YR4/6）の粘度の高いシルト（3層）であった。

2 トレンチ

2トレンチ（1×2.5m）は岸辺の中央部に設定した。人力で約30cm掘削したが、1トレンチ同様にトレンチ底面からの湧水や船の往来による波で水没するため、これ以上の掘削はできなかった。堆積層は2層確認した（写真図版11-⑥、第12表）。表土（1層）は極粗粒砂と粗粒砂の互層の灰黄褐色（10YR4/2）の砂層で、根や貝殻を含んでいる。2層はオリーブ褐色（2.5Y4/4）の極粗粒砂層で、直径5cm程度の礫を含んでいる。

石積み列

石積み列に使用されている石材は、縦20～25cm、横30～40cm、厚さ約20cmの粗く表面を加工した、間知石状の石材である（写真図版10-⑥）。石積みは岸辺全体で断続的に確認でき、その延長は約147mに及ぶ。積み方は石材の隅を立てて積む、谷積み（落とし積み）と呼ばれる方法である。今回検出した石積み列は基部付近で、石積み上部は失われている。石積み護岸または建物の基礎であったと考えられる。

(4)まとめ

今回の調査では、貞山堀に関する造構・遺物は検出されなかった。石積み列については、石材の積み方や仙台市宮城野区蒲生地区での調査成果（仙台市教育委員会2010・2018）から構築時期は近現代である可能性が高い。今回の調査地点付近は掘削などを伴わない袋詰玉石による護岸であること、調査結果から貞山堀との関わりが低いと考えられるため、当初の計画通りに実施して問題がないと判断した。

第5節 長須賀遺跡（第21～26図、写真図版12・13）

（1）遺跡の概要

長須賀遺跡は七ヶ浜町花潤浜字長須賀地内に所在する古墳時代後期～平安時代の貝塚・製塩遺跡である（第22図）。町内には表浜貝塚や水浜遺跡など、主に陸奥国府多賀城へ塩を供給したと考えられる製塩遺跡が点在しており（第21図）、本遺跡もこのような遺跡の一つである。遺跡は菖蒲田海水浴場の北東側に広がる浜堤上に立地し、現海岸線からは約150mの距離にある。昭和44～46（1969～71）年に東北学院大学工学部技術史研究会による発掘調査が行われており（※註2）、古代の製塩炉と製塩土器集中遺構を検出している。出土遺物は土師器、須恵器、厚手の製塩土器片などが出土している（第23図）。昭和45年の調査では、2か所で硬く締まった灰層の広がりを検出しており、製塩遺構であると考えられる（第25・26図）。昭和63（1988）年には町道整備及び個人住宅建築に伴う確認調査が行われている。また、平成24・25年度には県道改良事業や高台移転地の雨水排水路整備、造成発生土仮置き場整備に伴う確認調査が行われ、炉跡14基、土坑16基、焼土面1か所、貝層・遺物包含層2か所、多数のピットが検出された（第23図）。遺物は古墳時代後期の土師器、奈良・平安時代の土師器・須恵器、製塩土器、骨角製品、鉄製品、動物遺存体（貝類）などが出土している。製塩土器は在地の厚手の製塩土器に交じって、三河湾沿岸地域で主に出土する棒状脚を持つ製塩土器片が出土している（第14図2）。

※註2：前報告（七ヶ浜町教育委員会2016）では、東北学院大学工学部技術史研究会による昭和44・45年の2か年にわたる調査を1次調査として報告した。報告後、昭和45年の発掘調査概報（ファイル縦じ）と昭和46年の埋蔵文化財関係手続書類一式（ファイル縦じ）を発見した。調査概報に掲載されている図面と写真などを精査したところ、昭和44・45年の調査地点の間は約90m離れており、それぞれ異なる地点の調査であることが判明した（第23図）。また、昭和46年の調査地点は昭和44年の調査地点付近であり、土師器や須恵器、骨角製品、土鍤などが出土したことが判明した。このことから、昭和44年調査を1次調査、昭和45年調査を2次調査、昭和46年調査を3次調査とすべきであるが、調査次数の修正により今回報告分の調査次数に影響を及ぼし、混乱をきたすと判断したため修正は行わなかった。

（2）調査要項

遺跡名 長須賀遺跡（宮城県遺跡地名表登録番号 20006）
調査地 七ヶ浜町花潤浜字長須賀地内
調査原因 長須賀地区多目的広場整備
調査担当 田村正樹（七ヶ浜町教育委員会）
調査期間 令和元（2019）年11月26日
対象面積（事業面積） 約66,950m² 調査面積 10.6m²

（3）調査の概要と成果

令和元年度に町建設課より花潤浜長須賀地区に多目的広場を整備する計画が示され、事業範囲が遺跡範囲のはば全般に及ぶことが判明した。宮城県教育庁文化財課、町建設課、町教育委員会生涯学習課文化財係の三者で協議を行った結果、整備される諸施設の大部分が造成盛土内で取り、遺構が残存する下層まで工事が及ばないこと、計画地北東側は平成24・25年度に確認調査を行っており、遺構の分布状況などがすでに把握されていることから、これまで調査が行われていない計画地南西側で遺構・遺物の有無を確認するために確認調査を実施することとなった。計画地西端の深い掘削を伴う擁壁設置場所付近にトレントレンチ2本（26・27トレントレンチ）を設定し（第24図）、重機を使用して掘削を行った。